茨城県障がい者スポーツ指導者に関する調査（平成 30 年度）

筑波大学大学院人間総合科学研究科体育学専攻

茨城県寄付講座

主な調査結果

茨城県の障がい者スポーツ指導員は549人（平成30年度登録者）

茨城県障がい者スポーツ指導者協議会に所属している日本障がい者スポーツ協会公認の障がい者スポーツ指導員は現在549人である。アンケート回答者246人の結果では、初級が全体の79%を占め、中級が16.3%、上級は2.4%であった。

資格の取得者は福祉関係者が多い。高齢になってからの取得も見られる

資格取得者の職業は「福祉関係者」「その他」「教育関係者」の順に多い。取得してからの経過年数では、「10 年以上」が 3 割以上と最も多いが、60 代・70 代で「2 年未満」の者も 1 割強存在し、高齢になってから新たに資格を取得する者がいることが分かった。資格を取得した受講講習では、「日本障がい者スポーツ協会又は都道府県での講習」が 7 割と高かった。

昨年度活動をしなかった有資格者は約4 割、月に1 回以上活動した者は約３割であった

「昨年度1年間活動を全くしなかった」と答えた者が39.8%、「1年に数回」が27.2%であり、回答者の約6割が定期的な活動に参加していなかった。一方、「月に1 回程度」以上活動した者は31.7%であり、12.1%は「週に1 回程度」以上の活動をしている。年代別では、「週に1 回程度」以上の割合で見ると、60 代が30.2%と高く、次いで40 代の15.3%であった。

主として活動しているスポーツはボッチャ、卓球バレーが多く、1種目のみの活動が3割強であった

主として活動しているスポーツ種目は「ボッチャ」が 24.4%、次いで「卓球バレー」(23.2%)、「陸上」(17.5%)、「レクスポーツ」(14.6%)、「フライングディスク」(14.2%)、「水泳」(13.4%) の順であった。活動している種目数が1種目と回答した人は35.8%で最も多く、活動する種目が無いと答えた人は20.3%であった。

指導員の多くは指導だけではなく幅広い役割を担っている

活動の役割では「一緒に運動やプレーをする」が 35.8%、「大会の審判、役員、補助員」(35.4%)、「運動やスポーツ教室での指導の補助」(34.1%) であった。「運動やスポーツ教室での主たる指導者」は、2 割程度であり、多くの指導員が、障がいのある方と共にスポーツを楽しみ、指導以外の補助や付添い、団体の運営等幅広い役割を担っていることが分かった。

指導員の約4割に不安があり、研修内容として指導法やリスクマネジメントが挙げられた

指導時に不安に思っている指導員の割合は4割強と高いことが分かった。研修内容として「障がい者スポーツの指導方法」(58.9%)「ヒヤリ・ハットの事例と改善方法」(32.5%) の希望が高かった。

活動するには、仕事や学業との調整が一番の問題

活動上の問題点として、約半数が「仕事や学業と重なることが多い」を挙げ、「指導に不安がある」「活動の場（機会）に関する情報が少ない」「育児や介護など家庭の事情を優先せざるを得ない」が約 2 割であった。活動頻度群別に見ると、「月に1 回以上」群では、「仕事や学業と重なることが多い」に次いで「お金が掛かる」が2割弱と多かった。

1. 調査概要

1．1 調査目的

茨城県における障がい者スポーツ指導者に関する現状及び課題等を明らかにすることによって、地域で健常者と障がい者が共にスポーツ・レクリエーション活動を楽しむための方策に資するデータの把握及び分析を行うとともに、障がい者の指導に対応できるスポーツ・レクリエーション指導者の可能性を検討することを目的とする。

1．2 調査方法

(1) 調査方法

無記名式の質問紙調査。

回答は、郵送で受け付けた。

(2) 調査内容

- 回答者の属性
- 資格取得時の受講講習
- 資格の取得経過年数
- 資格取得の目的
- 障がい者スポーツ指導員資格を取得して良かったこと
- 昨年度の障がい者スポーツ指導員の活動状況
- 活動した主なスポーツ種目
- 主な活動場所
- 活動における主な役割
- 活動に対する満足度
- 指導時の不安度
- 活動に携わる際の問題点
- 希望する研修内容
- 協力依頼への対応
- 協力可能な場合の活動頻度

(3) 回収結果

平成 30 年度茨城県障がい者スポーツ指導者協議会に登録している 549 人に送付した結果、回収数は 246 件、回収率は 44.8%であった。

(4) 調査期間

2018 年 11 月～2018 年 12 月

(5)調査担当者

筑波大学体育系大学院人間総合科学研究科体育学専攻アダプテッド体育・スポーツ学

齊藤まゆみ、松原　豊、杉山文乃

２．調査結果

２．１　回答者の属性

本調査の回答者の属性を以下に示した。回答者の男女の割合は、男女ほぼ半々であった。（男性 121 名、女性 124 名）日本障がい者スポーツ協会公認障がい者スポーツ指導員の登録者の男女比（男性 46.2%、女性 53.8%）と比較すると男性の割合が若干多かった。（表１）

年代別に見ると、登録者数全体では 20 代の指導員数が 4 割であるのに対し、本調査の回答は 20 代と 70 以上の割合が低く、その他の年代は 20%前後であった。（表１、図１）

居住地域別では、県南、県央がそれぞれ約 30%を占め、県西、県北は 20%以下、鹿行は 9%と最も少なかった。（図２）

取得資格の種類別で見ると、初級指導員は 194 人（79.2%）、中級指導員は 40 人（16.3%）、上級指導員は 6 人（2.4%）、障がい者スポーツコーチ 2 人（0.8%）、障がい者スポーツトレーナー3 人（1.2%）であった。（図３）

表１　回答者の属性（性別・年代別）

年代	男	女	総計
20代	11	10	21
30代	28	26	54
40代	33	26	59
50代	22	28	50
60代	18	25	43
70以上	9	9	18
未記入			1
	121	124	246

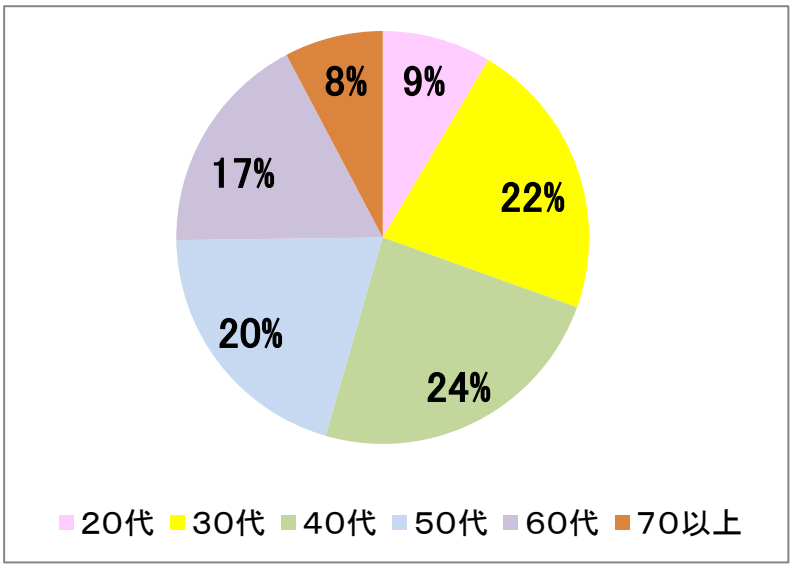

図１　回答者の年代別割合

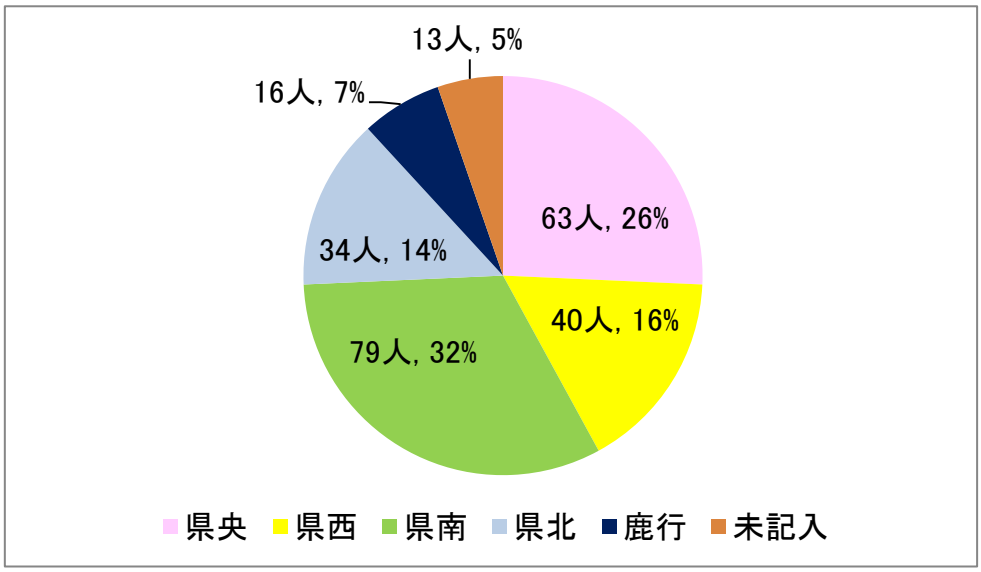

図２　回答者の居住地別割合

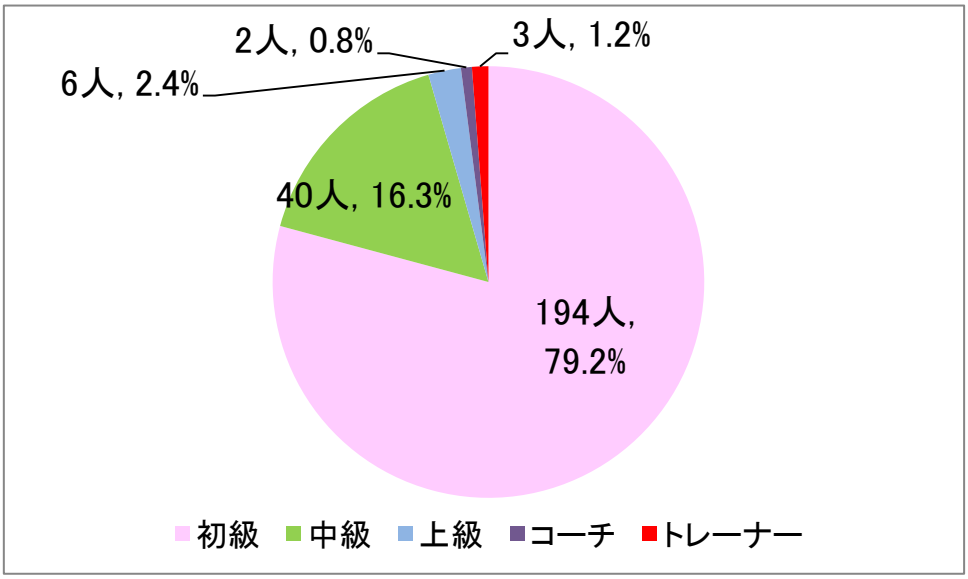

図３　回答者の取得資格

２．２ 指導員資格の取得状況

(1) 資格の種類別取得状況

① 全体・年代別

初級は 194 人で約 80%、中級は 40 人で 16%、上級は 6 名、コーチ 2 人、トレーナーが 3 人であった。

年代別では、40 代が最も多く、次いで 30 代、50 代、60 代であった。20 代、70 代からの回答者は少なかった（表２）。

年代別に資格種別の割合を見ると、30 代は中級が 31.5%と他の年代より高かったが、上級は見られなかった。40 代以上になると、中級、上級の割合が増える傾向にあった（図４）。

表２　年代別の資格種別人数

	初級	中級	上級	コーチ	トレーナー	総計
20代	16	3			1	20
30代	37	17				54
40代	52	6			1	59
50代	43	5	1		1	50
60代	33	6	3	1		43
70以上	13	3	2	1		19
未記入						1
総計	**194**	**40**	**6**	**2**	**3**	**246**

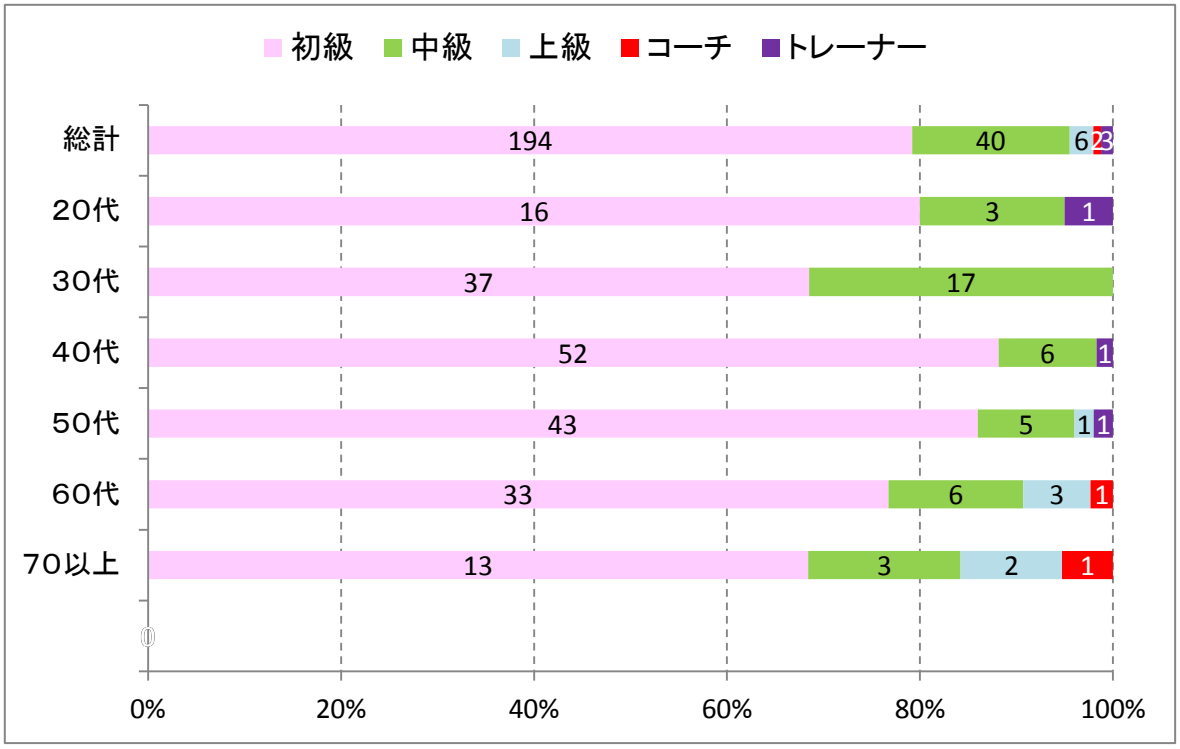

図４　年代別の資格種別の割合

② 資格取得時の受講講習場所

資格取得時の受講講習の状況を見ると、「茨城県障がい者スポーツ・文化協会主催の講習会」での取得者が 40.4%と最も多く、次いで「日本障がい者スポーツ協会主催の講習会」が 31.4%、「認定校」が 13.9%、「茨城県理学療法士会主催の中級障がい者スポーツ指導員養成講習会」が 8.6%。「日本体育協会スポーツ指導者対象の講習」が 3.4%であった。市町村での講習を受講したと回答された方が一人いた。「その他」では受講した講習会がわからない、無記名、職場で案内されて受講したなどの回答があった（図５）。

資格取得時の受講講習別に、現在の資格種別の割合を見ると、「茨城県障がい者スポーツ・文化協会主催の講習会」「認定校」及び「市町村主催の講習会」での取得者は、初級がほとんどであり、中級以上の資格は「日本障がい者スポーツ協会主催講習会」「日本理学療法士協会主催の中級スポーツ指導員養成講習会」及び「日本体育協会スポーツ指導者対象の講習」で受講したという回答が多かった。

「認定校」で資格を取得した者は、31 人が初級、3 人が中級であった。この結果は、認定校で取得できる資格は初級が主であるためである。

「茨城県理学療法士会主催の中級障がい者スポーツ指導員養成講習会」は中級が 19 名と最も多く、初級が 1 人、スポーツトレーナーが 1 人であった。この講習は「茨城県理学療法士会」と「茨城県障がい者スポーツ・文化協会」が主催して行われる、理学療法士を対象として実施される講習会で、初級指導員を免除し、中級指導員から取得できる養成講習会である。

「日本体育協会スポーツ指導者対象の講習」は、中級が 5 人であった。この講習は日本障がい者スポーツ協会が主催するもので、日本体育協会公認スポーツ指導者資格保持者で 5 年以上の指導経験を持つ者を対象にしており、初級指導員を免除し、中級指導員から取得できる養成講習会である。

上級指導員の養成講習会は、日本障がい者スポーツ協会が年に 1 回開催し、中級は日本障がい者スポーツ協会が年に 2 回と 4 道府県で年に各 1 回、初級は全国の都道府県・市区の 60 か所で、地域主催で開催されている。

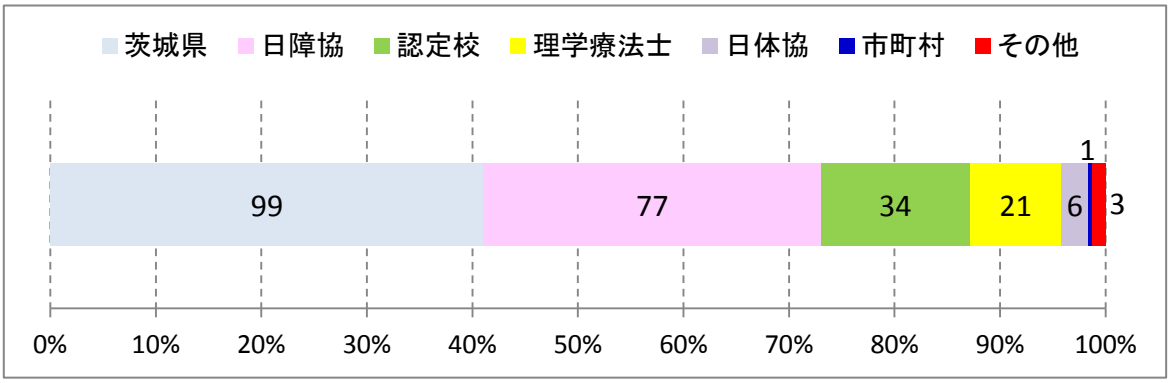

図 5　資格取得時の受講講習場所

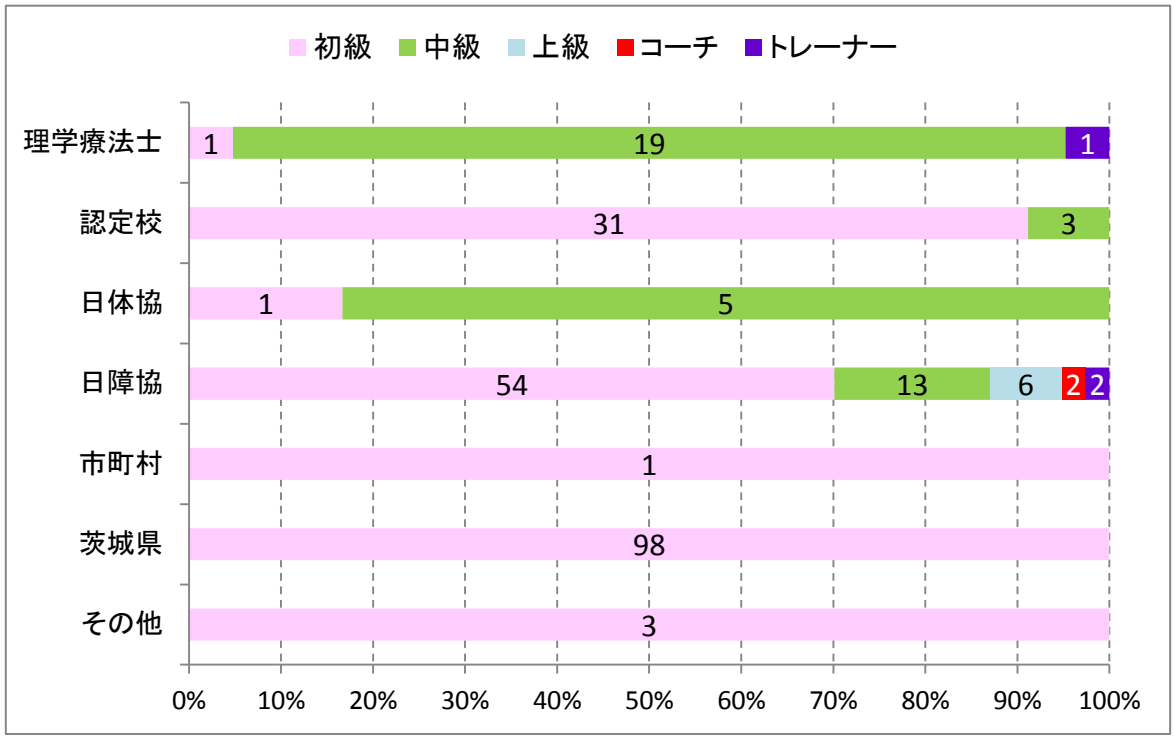

図 6　資格の種類別取得状況

③ 職業別

回答者の職業の状況を確認すると、「福祉関係の施設・機関等のスタッフ」が 27.3%と最も多く、次いで「教育関係の施設・機関等のスタッフ」(16.7%)、「医療関係のスタッフ」(14.7%)、「無職」(14.7%)、「スポーツ関係の施設・機関等のスタッフ」(4.9%) であった（図７)。また、「その他」(会社員など) と回答した者が 20%であった。

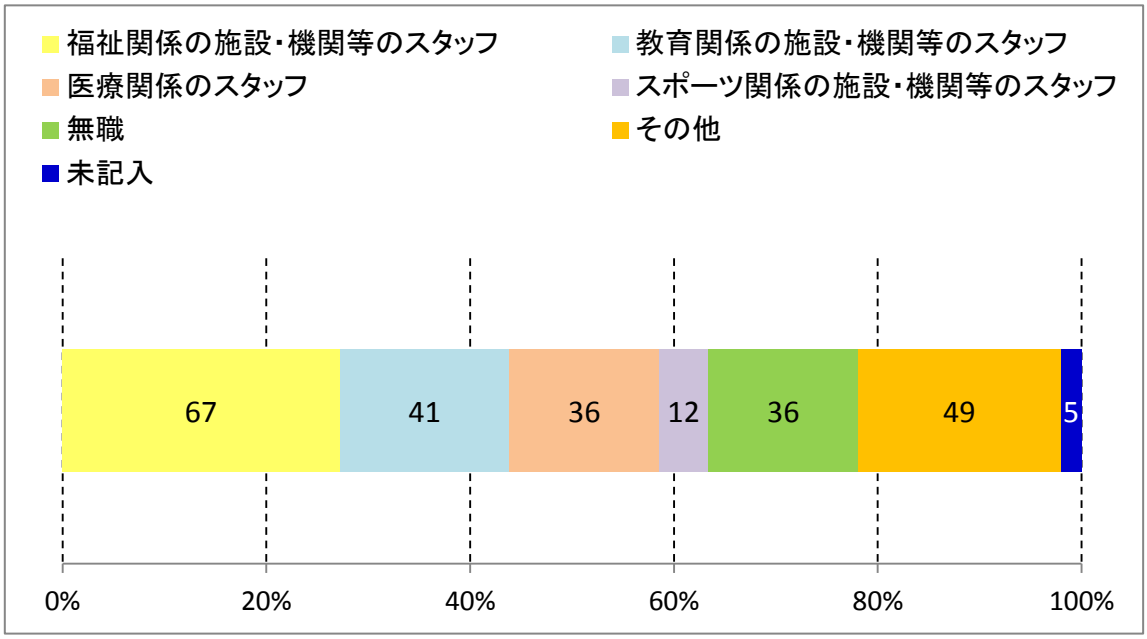

図７　回答者の職業

職業別に資格種別の割合を見ると、医療関係者では中級が半数以上であった。これは理学療法士の方が中級以上の資格を取得していることと関係があると思われる。どの職種においても中級以上の資格取得者がいることが認められた（図８)。

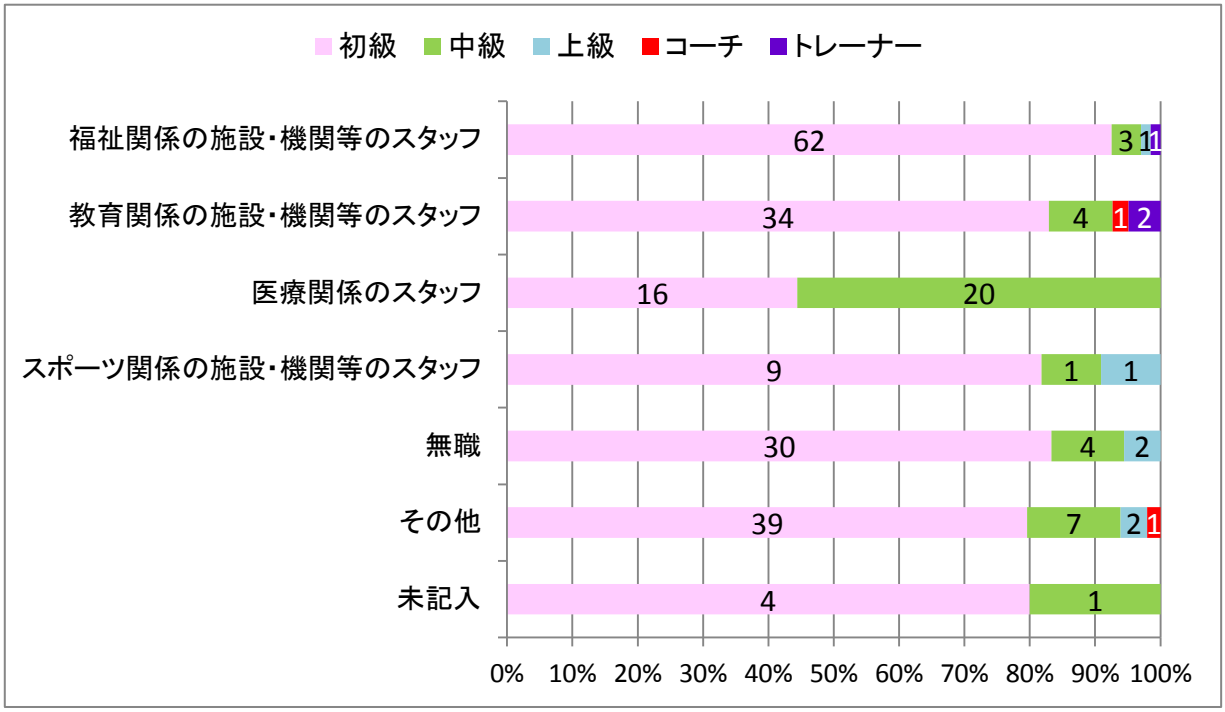

図８　職業別資格の取得状況

(2) 資格の取得経過年数

「最初に障がい者スポーツ指導員資格を取得してから何年になりますか？」と尋ねたところ、全体では「10 年以上」と答えた者が 35.1%と最も多く、次いで、「2 年未満」(26.9%)、「2 年以上～5 年未満」(19.2%)「5 年～10 年未満」(18.4%) の順であった。

性別に見ると、「10 年以上」の回答では女性が多く、「2 年未満」の回答では逆に男性の方が多かった

年代別では、年代が上がるにつれて経過年数が上がる傾向が見られた。

資格種別に見ると、初級指導員では「10 年以上」と答えた方が 34.4%と最も多く、初級でも取得経過年数が長い者がいることが分かる。中級指導員では「2 年未満」と答えた者が 45%と多かった。上級指導員は、6 人全員が「10 年以上」であり、コーチは「10 年以上」1 人、「5 年以上～10 年未満」1 人、トレーナーは、「5 年以上～10 年未満」「2 年以上～5 年未満」「2 年未満」各 1 人であった（図 9）。

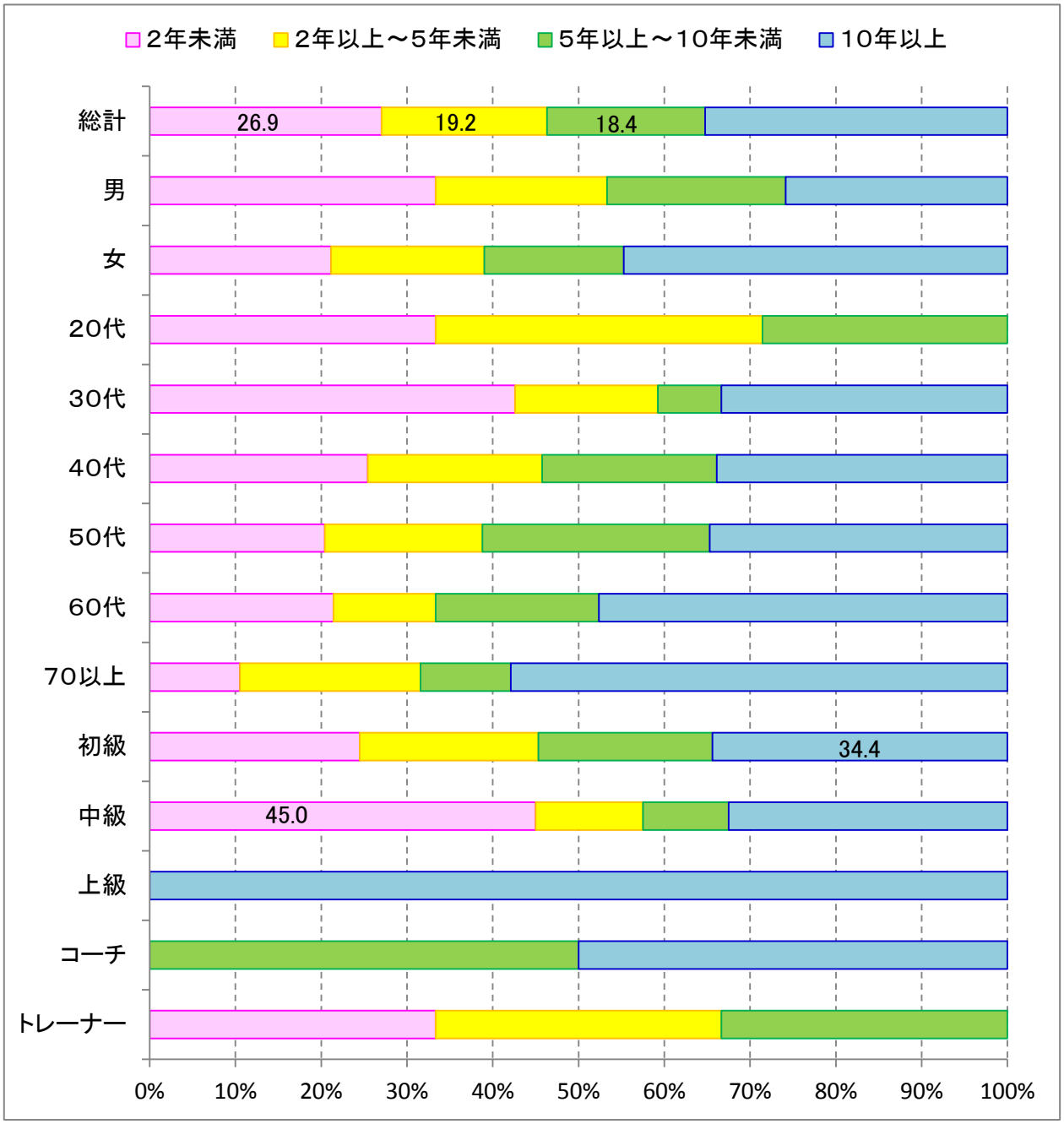

図 9　資格の取得経過年数　（全体、性別、年代別、資格種別）

(3) 資格の取得目的

「あなたが障がい者スポーツ指導員資格を取得した目的は何ですか？」を尋ねたところ、全体では「障がい者の競技スポーツに関心があった」（65.9%）が最も多く、次いで「障がい者スポーツに関する知識や技能を高めたかった」（56.5%）、「障がい者の日常的なスポーツに関心があった」（35.8%）、「ボランティア等で社会貢献をしたかった」（27.6%）、「仕事の内容から取得するのが良いと考えた」（26.4%）、「障がい者福祉に関心があった」（24.0%）であった（図 10）。

資格種別では、コーチ、トレーナーは人数が少ないため、割合による比較ができないため、上級、中級、初級で比較した。中級・上級指導員で高い割合を示したのは「障がい者の競技スポーツに関心があった」（77.5%・66.7%）と「障がい者スポーツに関する知識や技能を高めたかった」（70.0%・66.7%）であった。中級指導員は「障がい者の日常的なスポーツに関心があった」（52.5%）が初級・上級指導員よりも高く、「仕事の内容から取得するのが良いと考えた」は初級・中級指導員が上級指導員より高い特徴が見られた（26.4%・26.3%）。初級指導員では「ボランティア等で社会貢献をしたかった」（30.4%）、「障がい者福祉に関心があった」（26.3%）の取得目的の割合が、中級・上級指導員よりも高い特徴が見られた。

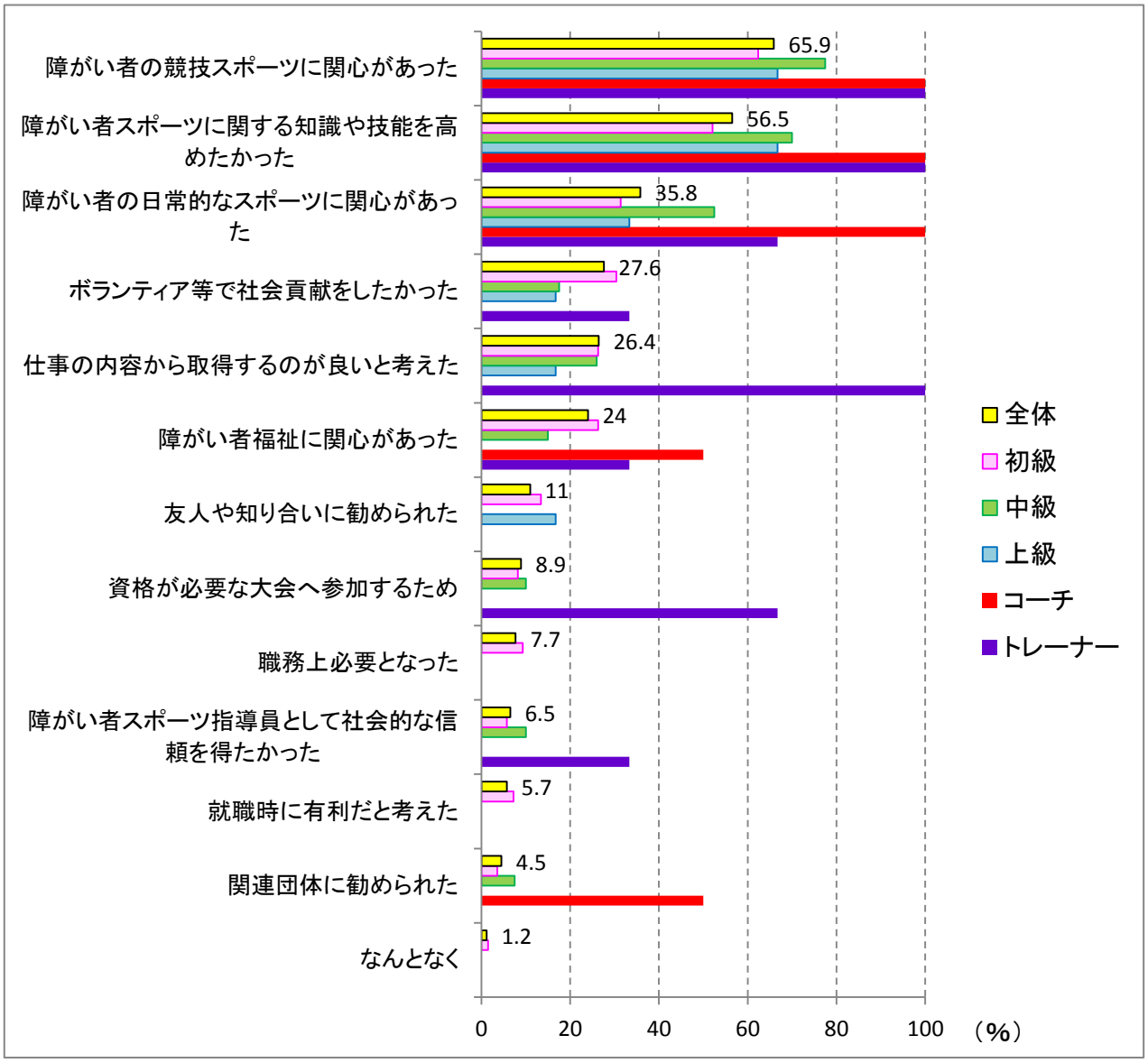

図 10　資格の取得目的　（全体、資格種別 複数回答）

(4) 資格取得の利点

「あなたが障がい者スポーツ指導員資格を取得して良かったことは何ですか？」と尋ねたところ、全体では「様々な人との出会いが増えた」が 51，6%（127 人）と半数以上の者が感じており、次いで「障がい者スポーツ指導に関わる情報が得やすくなった」(35.8%)、「障がい者の笑顔がたくさん見られた」(33.7%)、「取得前よりも障がい者スポーツに関わる回数が増えた」(31.7%) などが、取得して良かったことと感じていた（図表 11)。資格種別で見ると、中級指導員では「取得前よりも障がい者スポーツに関わる回数が増えた」(37.5%) が初級・上級指導員に比べて高い割合であった。初級・中級指導員で「特になかった」と回答した人が 31 名（12.6%）いた。

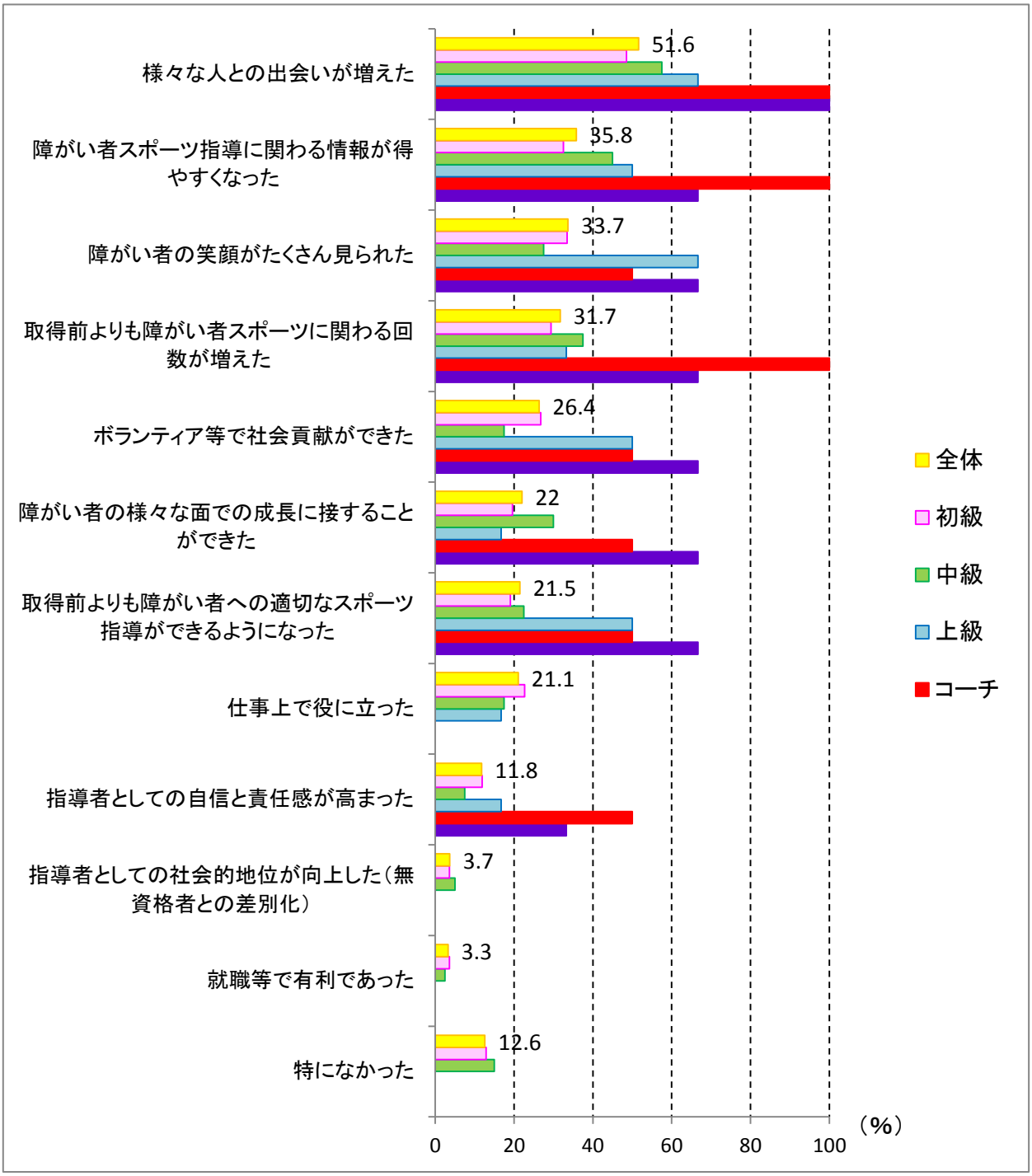

図 11　資格取得の利点　（全体、資格種別 複数回答）

２．３ 指導員としての活動の状況

(1) 指導員としての活動頻度

「昨年度、障がい者スポーツ指導員としてどの程度活動しましたか。」と尋ねたところ、「全くしなかった」と答えた者が 39.8%と最も多く、次いで「1 年に数回」が 27.2%であった。つまり、回答者の約 7 割が定期的な活動に参加していなかった。一方、回答者の 31.7%、78 人が「月に 1 回程度」以上の定期的な活動を行っていることが分かった。また、12.1%（30 人）は「週に 1 回程度」以上何らかの活動をしていることも分かった（図 12）。

性別で見ると、男女差は見られず、全体と同じ割合であった。

年代別に見ると、「全くしなかった」者の割合は、20 代及び 30 代で 6 割を超え、次いで 50 代（40%）、40 代（42.9%）であった。20 代、30 代では「月に 1 回程度」以上活動している者は、それぞれ 18.0%、18.9%と少なかった。「週に 1 回程度」以上の割合で見ると、60 代が 30.2%と高く、次いで 40 代の 15.3%であった。逆に 20 代、30 代で「週に 1 回程度」以上の活動はほとんど無いことが分かった。

資格種別に見ると、初級指導員で「全くしなかった」は 4 割を超え（42.8%）、週に 1 回以上定期的に活動している者は 10.5%と 1 割程度であった。中級指導員では「全くしなかった」（32.5%）と「1 年に数回」（27.5%）が約 3 割、週 1 回以上定期的に活動している者は 2 割であった。上級指導員以上の資格者は、1 人を除いた全員がなんらかの形で活動していることが分かった。

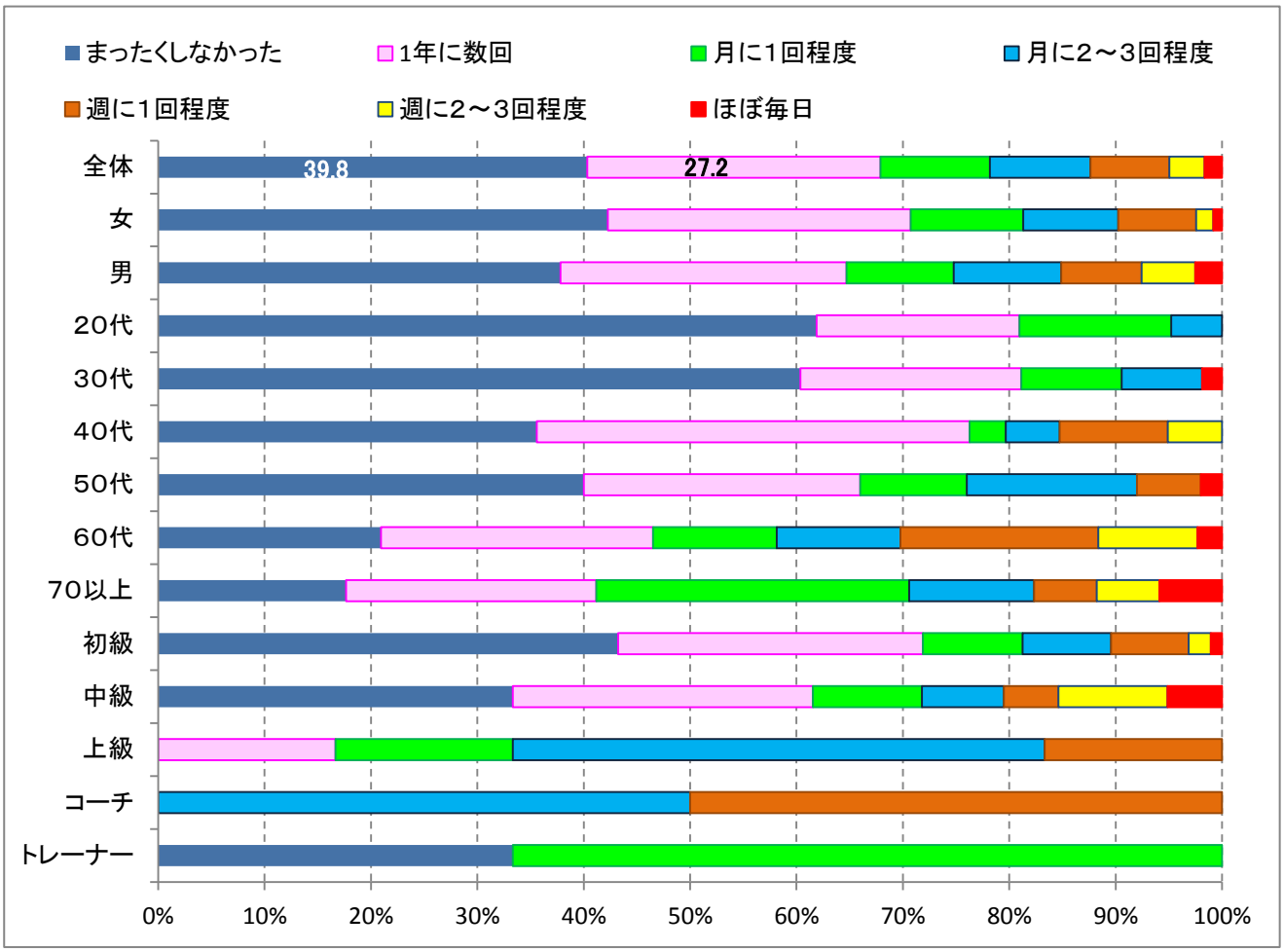

図 12　2017 年度の障がい者スポーツ指導員としての活動頻度

(2) 主に活動しているスポーツ種目

「主なスポーツ種目は何ですか。」と尋ねたところ、様々なスポーツ種目が回答されたが、種目によって活動している指導員の人数に大きな偏りが見られた（図 13）。一番多かったのが「ボッチャ」でのべ 60 人（24.4%）、次いで「卓球バレー」（23.2%）、「陸上」（17.5%）、「レクスポーツ」（14.6%）、「フライングディスク」（14.2%）、「水泳」（13.4%）の順であった。その他として、「空手道」、「パワーリフティング」「車椅子フェンシング」「アーチェリー」、「スキー」、「ゴールボール」、「トランポリン」、「ライフル射撃」、「グラウンドゴルフ」、「馬術」、「トリムバレー」、「車椅子マラソン」、「ハンドバイク」、「フロアホッケー」、「セーリング」、「アルペンスノーボード」、「オープンウォーター競技」、「ビームライフル」など多彩な種目が回答された。活動している種目数が 1 種目と回答した人は 88 人（35.8%）で、最も多かった。活動する種目が無いと答えた人は 50 人（20.3%）であった。

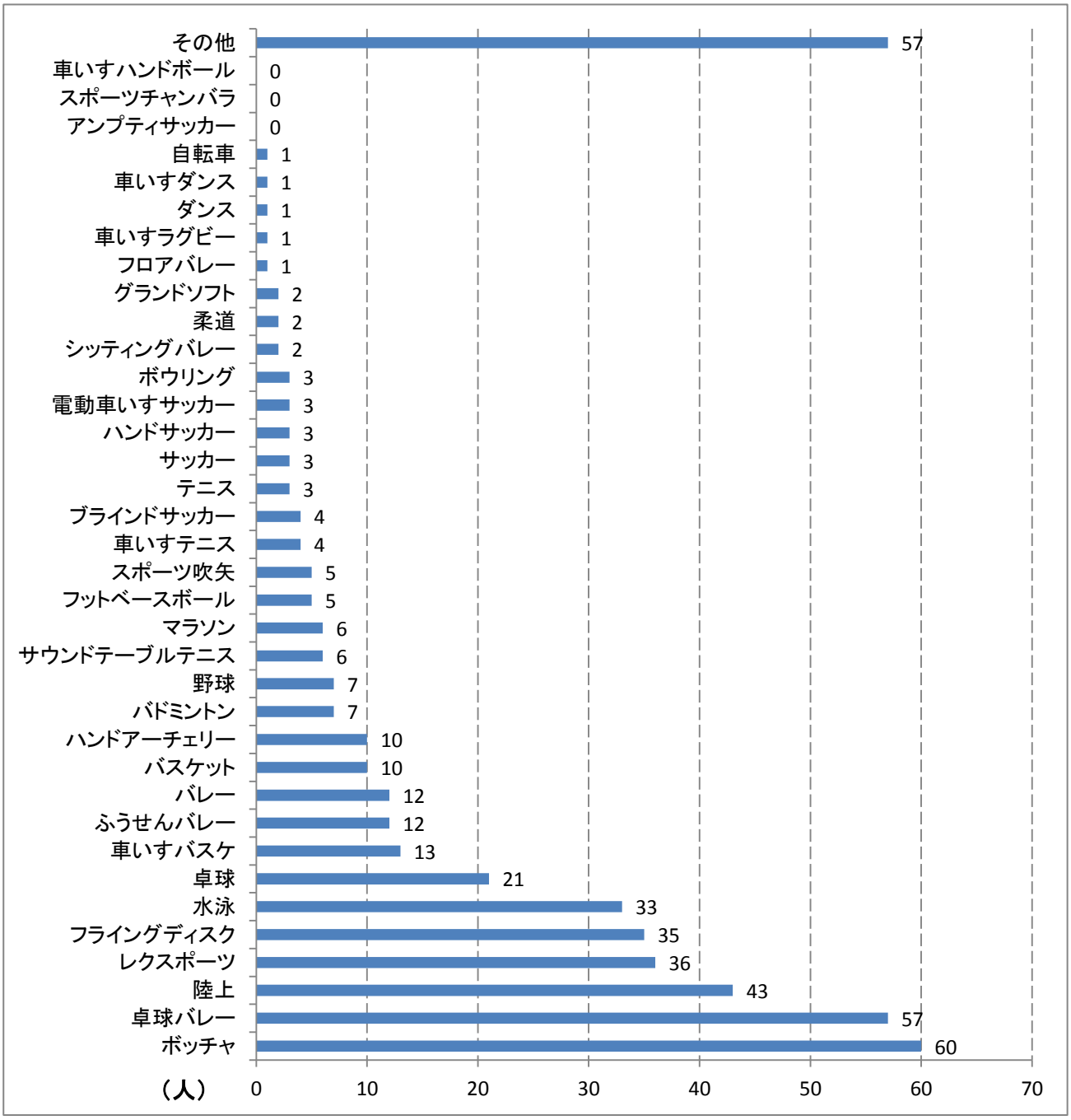

図 13　主に活動しているスポーツ種目（複数回答）

(3) 指導員としての主な活動場所

指導員として携わる主な活動場所について尋ねたところ、全体で最も多かったのは「大会等のイベント」の 37.8%で、短期的で不定期な活動であった。次いで「各種競技団体・各種障がい者スポーツ関連団体等」(30.5%)、「地域のクラブやサークル」(22.8%) の順となった (図 14)。また、「障がい者との個人的な付き合い」で活動している指導員も 1 割程度 (10.6%) 存在していた。一方、活動していないと回答した指導員が全体で 22.4%あった。

資格種別では、上級以上の資格者の人数が少ないため、初級・中級資格者との比較は難しいが、資格の種別には関係なくイベントや団体、地域のクラブ、職場、福祉等の施設など、あらゆる活動場所で一定数活動していることが示された。一方、初級資格者の 25.8%、中級資格者の 22.5%が活動していないと回答した。

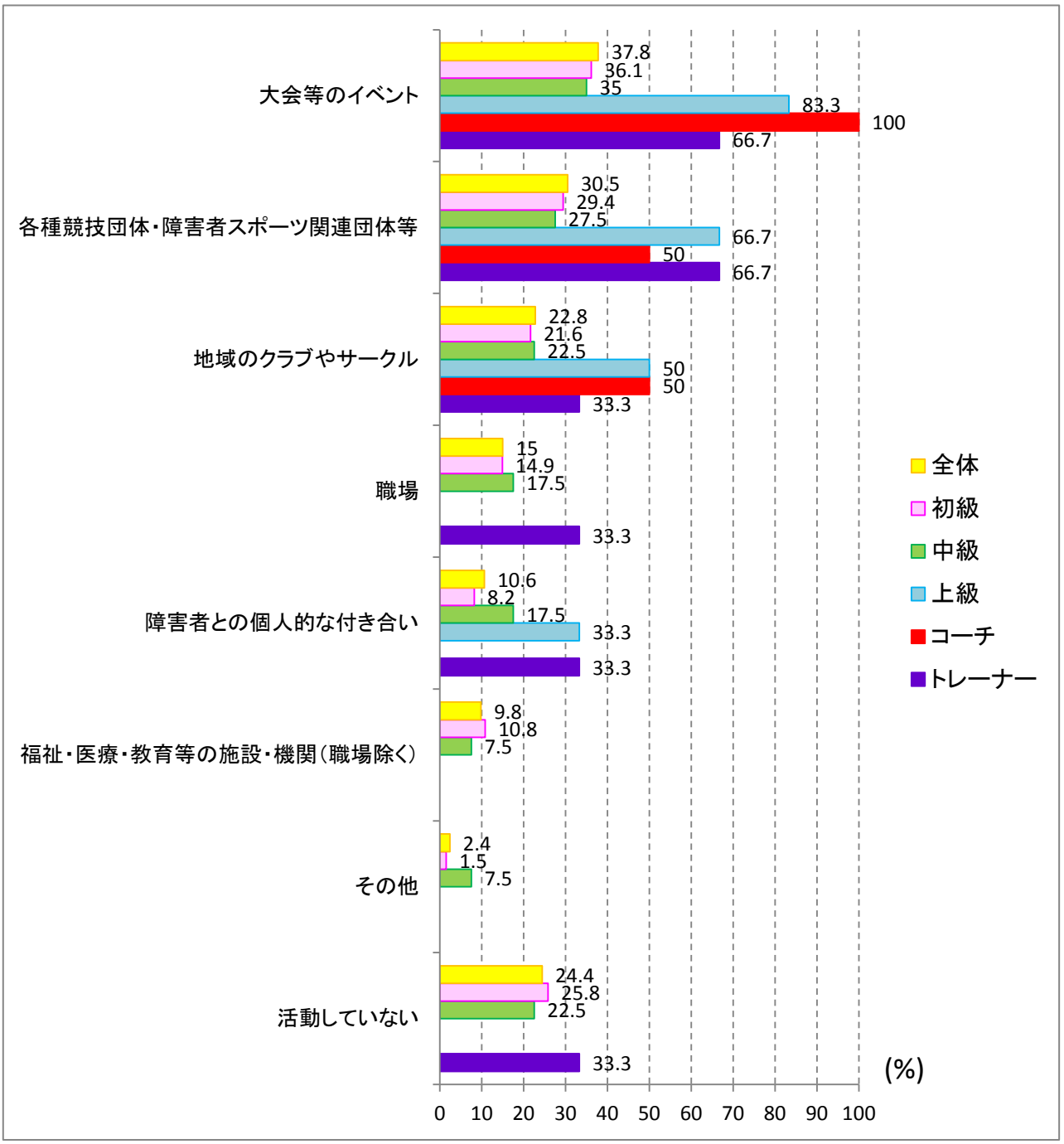

図 14　障害者スポーツ指導員としての主な活動場所　(全体、資格種別 複数回答)

(4) 活動場所での主な役割

指導員としての活動の場での主な役割について尋ねたところ、全体では「一緒に運動やプレーをする」が 35.8%と最も多く、次いで「大会の審判、役員、補助員」(35.4%)、「運動やスポーツ教室での指導の補助」(34.1%)であった。また、「運動やスポーツ教室での主たる指導者」は、全体の 2 割程度(21.1%)であり、多くの指導員が、障がいのある方とともにスポーツを楽しみ、指導以外の補助や付添い、団体の運営等幅広い役割を担っていることが分かった（図 15)。一方、活動をしていないとの回答が全体で 23.6%あった。

資格種別で見ると、「大会の審判、役員、補助員」「運動やスポーツ教室での主たる指導者」は、上級以上の資格者の割合が高くなっている。「運動やスポーツ教室での主たる指導者」では、初級の 18%に対し、中級 30.0%、上級 50.0%と資格の級と指導の割合に相関がみられた。また、資格種別に限らず、様々な役割を担って活動をしていることが示された。

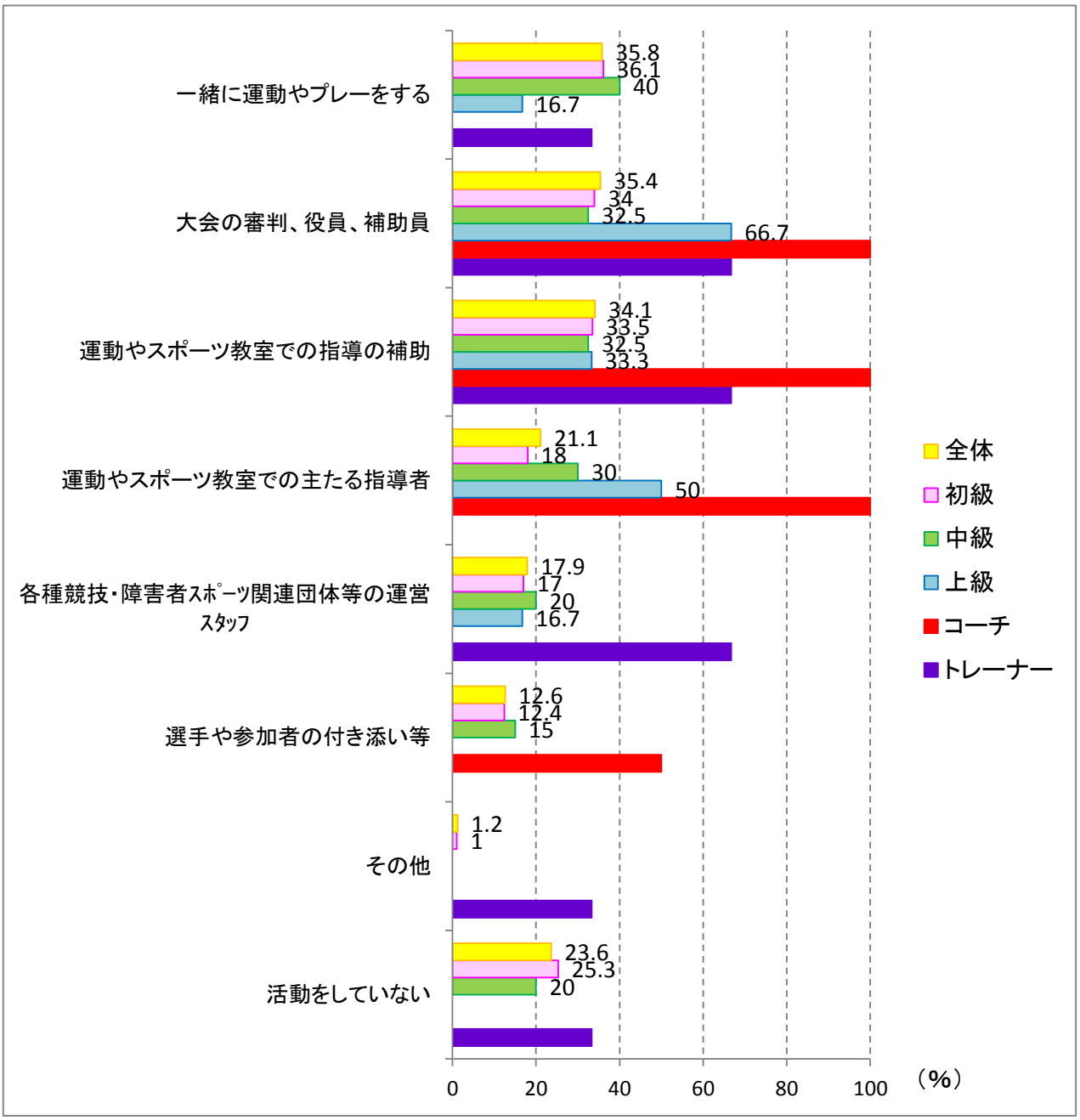

図 15　障がい者スポーツ指導員としての活動の場での主な役割　（全体、資格種別 複数回答）

２．４指導員としての活動の評価及び問題点

(1) 活動状況に対する満足度

「障がい者スポーツ指導員として今の活動状況に満足していますか？」と尋ねたところ、全体の 2 割（22%）が現在の活動に「満足」と答えている。一方、「満足していない（不満足）」者も、全体の約 2 割（18%）であった。性別による差は無かった

年代別では、20 代、50 代、60 代の満足度が高く、30 代、70 代の満足度が低かった。

資格種別に見ると、資格のレベルと満足度に相関はなく、上級指導員以上の資格者は不満足と回答したものはいなかったが、満足と回答した者も多くなかった。中級指導員は初級指導員に比較して満足していると回答した者の割合が多かったが、一方不満足と回答した者の割合も初級指導員に比べて多かった（図 16）。

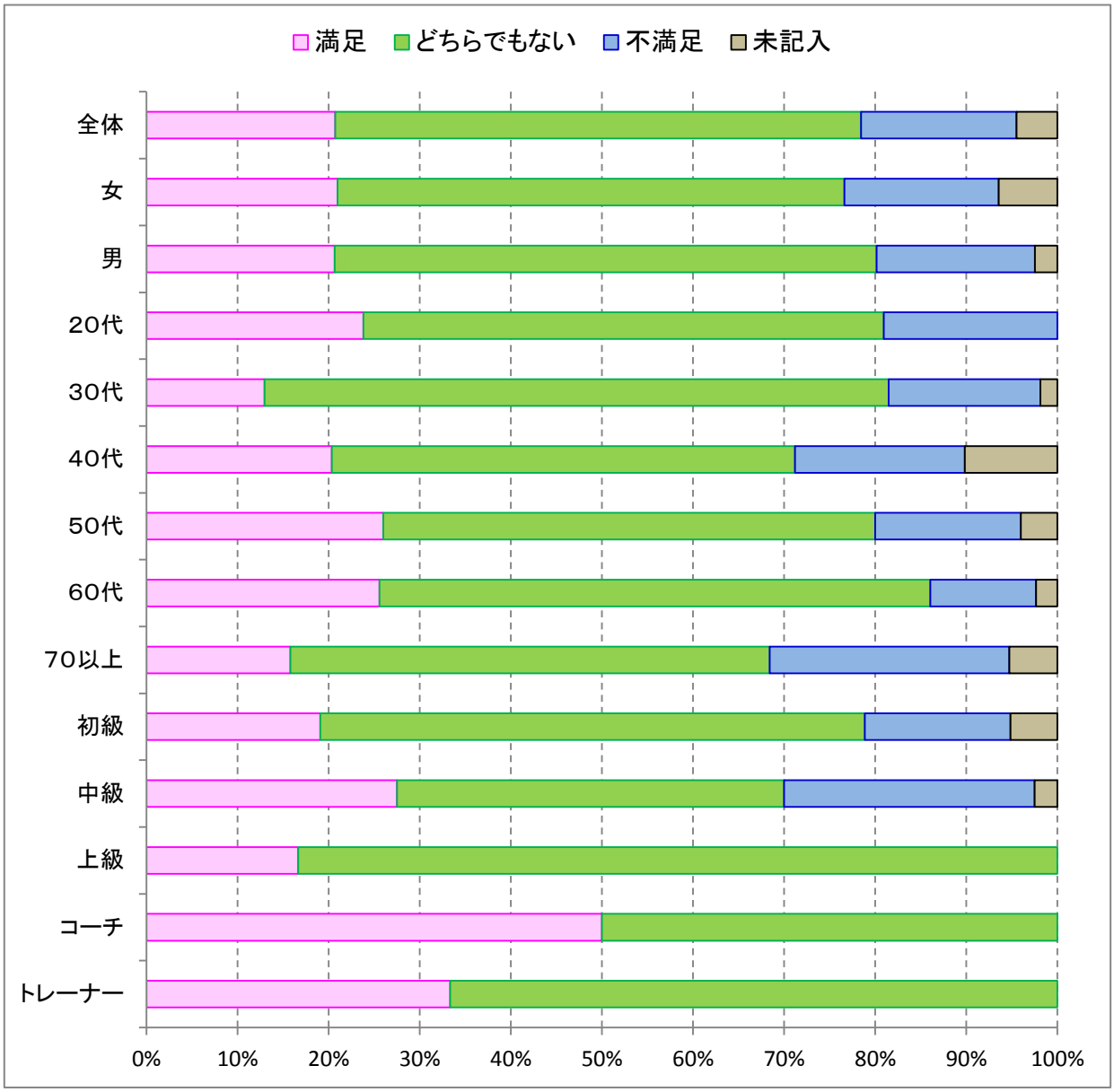

図 16　現在の活動状況の満足度（全体・性別・年代別・資格種別

(2) 指導時の不安度

「障がい者にスポーツや運動を指導しようとする時は、不安なく指導することができますか。」と尋ねたところ、「不安はない」と回答した者は全体の 1 割（10%）であった。一方、「不安がある」者は 4 割強（43%）を占めており、指導時に不安に思っている指導員の割合が高いことが分かった（図 17）。

性別による差は無かった。

年代別に見ると、「不安がある」と回答した者の割合は、30 代が最も高かった。次いで 40 代、70 代の順であった。不安度の低い年代は 50 代、60 代であった。活動頻度や満足度についても 50 代、60 代の割合が高いことから、積極的に活動しているのは 50 代、60 代の指導員であることが予想される。

資格種別では、初級指導員よりも中級指導員の方が指導時に不安を感じていることがわかった。上級指導員、コーチで不安があると回答した者はいなかった。

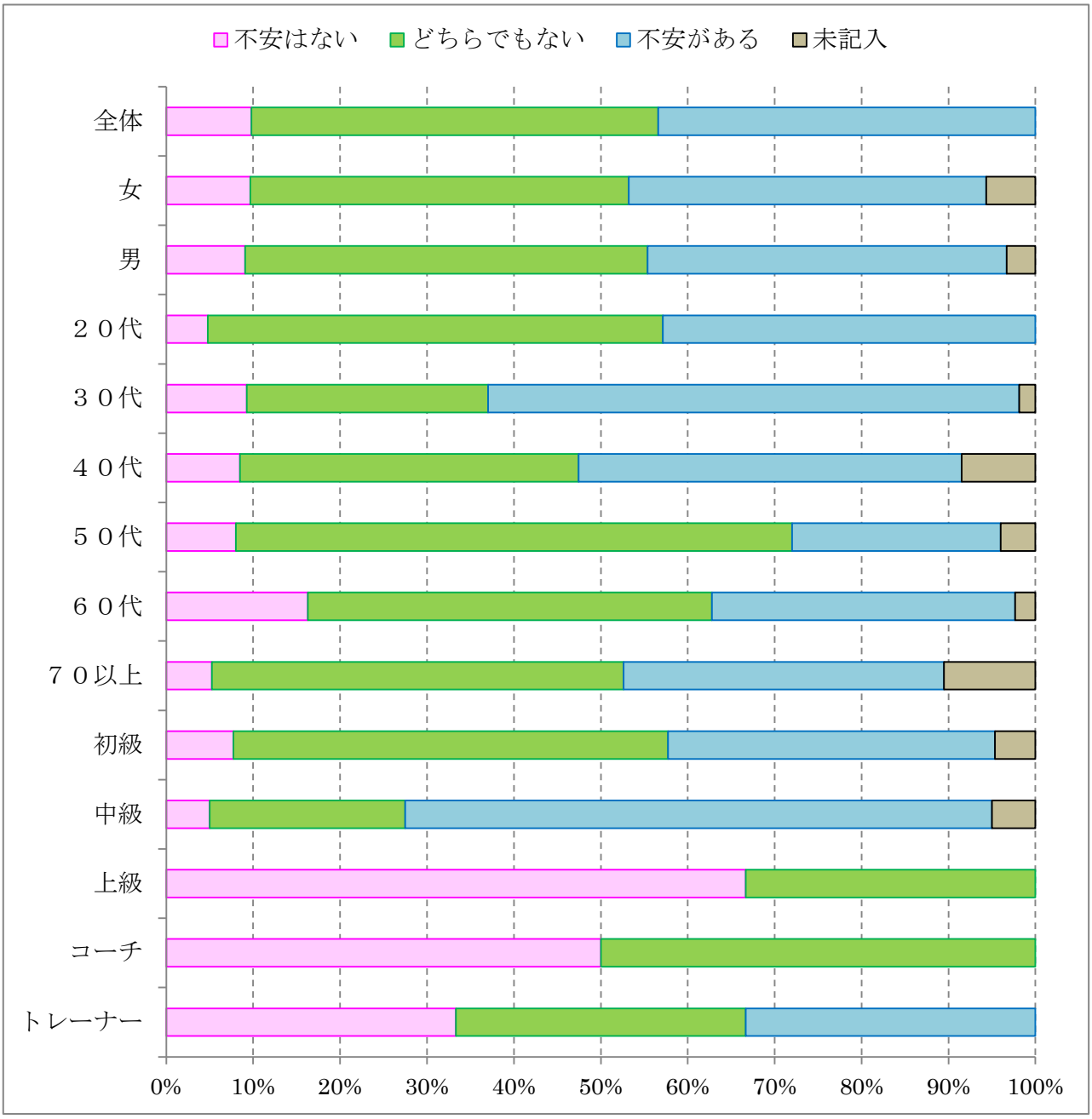

図 17　現在の指導時の不安度　（全体・性別・年代別・資格種別）

(3) 活動頻度と満足度・不安度の関連

活動頻度の状況と、現状の活動状況の満足度、並びに指導時の不安度との関連について見た。現在の活動状況の満足度については、活動頻度が高くなるに連れて満足度も高くなる傾向があった。「満足している」と答える者の割合が、「月 1 回程度」以上の頻度で高くなり、「月に２～３回」の頻度では「不満足」と回答した者はいなかった。「年に数回」「昨年度非実施」と回答した者は、「不満足」の回答が多くなり、「満足している」と回答した割合が減少した（図 18）。

指導時の不安度について見ると、満足度と同様、活動頻度が「月２～３回」の頻度で、不安度が少ない傾向にあった。一方、「月に 1 回程度」の活動をしている指導員の半数、「週 1 回以上」活動している指導員でも、約 3 割強の者が「不安がある」と答えている（図 19）。

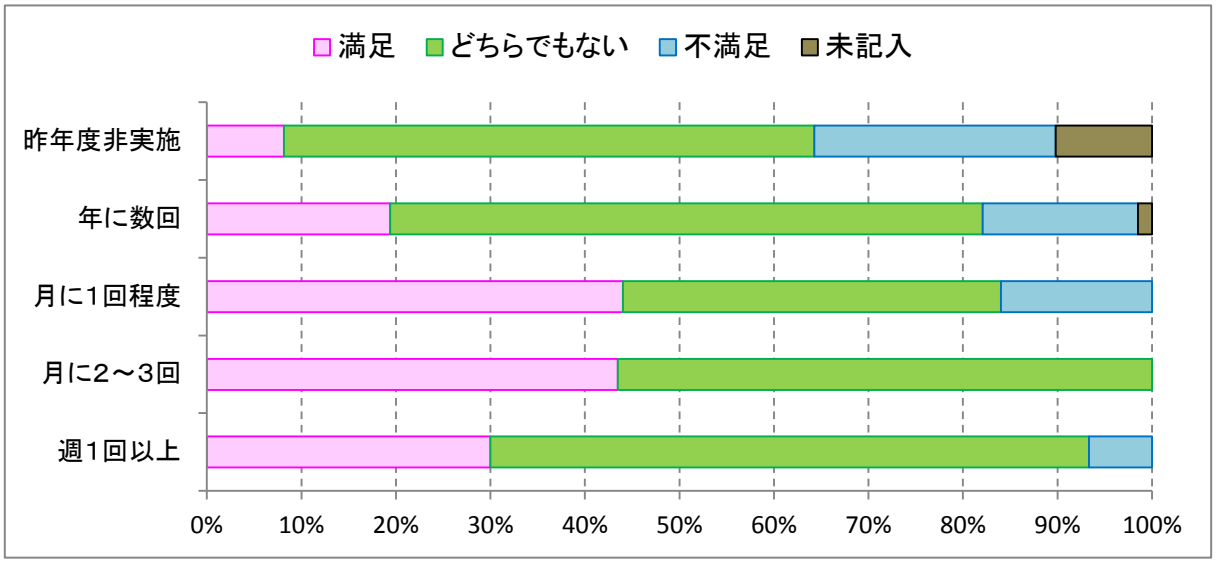

図 18　現在の活動状況の満足度（活動頻度別）

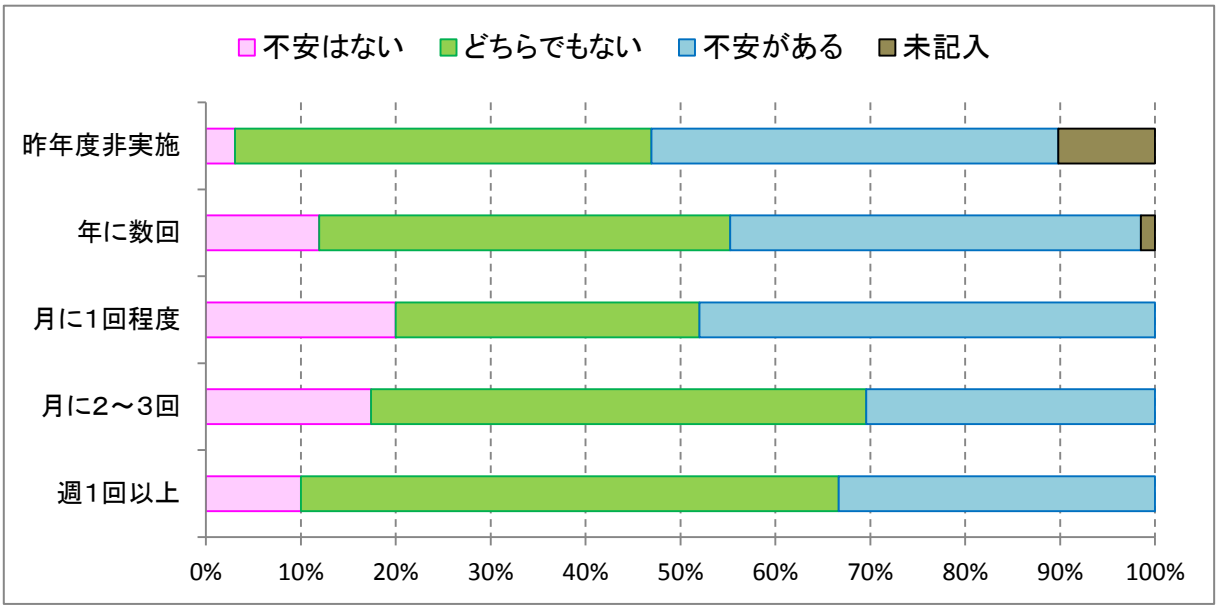

図 19　現在の指導時の不安度　（活動頻度別）

(4) 指導時の不安要素

「障がい者にスポーツや運動の指導等をする時、何に不安を感じますか？」と指導時の不安要素を尋ねたところ、「経験不足」が 49.6%と最も多く、次いで、「ルールなどに関する知識」(37.9%)、「障がいに起因する配慮すべき事柄」(33.3%)、「指導プログラムの立案」(21.6%) であった (図 20)。

活動頻度の状況を、「昨年度非実施」「年に数回」「月に 1 回以上」の 3 群に分け、指導時の不安要素との関連を見たところ、「昨年度非実施」群では 7 割近くの者が「経験不足」(66.3%) を一番の不安要素に挙げており、次いで「ルールなどに関する知識」(43.9%) について、不安に思っている者の割合も高かった。一方、他の活動頻度群では高い不安要素である「障がいに起因する配慮すべき事柄」は 25.5%と比較的低い結果となった。「年に数回」群では、「経験不足」が 58.2%と最も多く、次いで「ルールなどに関する知識」(50.7%)、「障がいに起因する配慮すべき事柄」(38.8%) であった。「月に 1 回以上」群では、「障がいに起因する配慮すべき事柄」が 46.2%と他の活動頻度群より高く、次いで「経験不足」(32.1%)、「ルールなどに関する知識」(26.9%)、「指導プログラムの立案」(25.6%)、「安全な環境作り」(20.5%)、「スタッフ同士や指導対象者との人間関係」(15.4%)、サークルやクラブの運営やマネジメント」(15.4%) など多様な不安要素が挙げられていた。「障がいに起因する配慮すべき事柄」に関しては、活動頻度が高くなるほど不安要素だと感じていることが分かった。

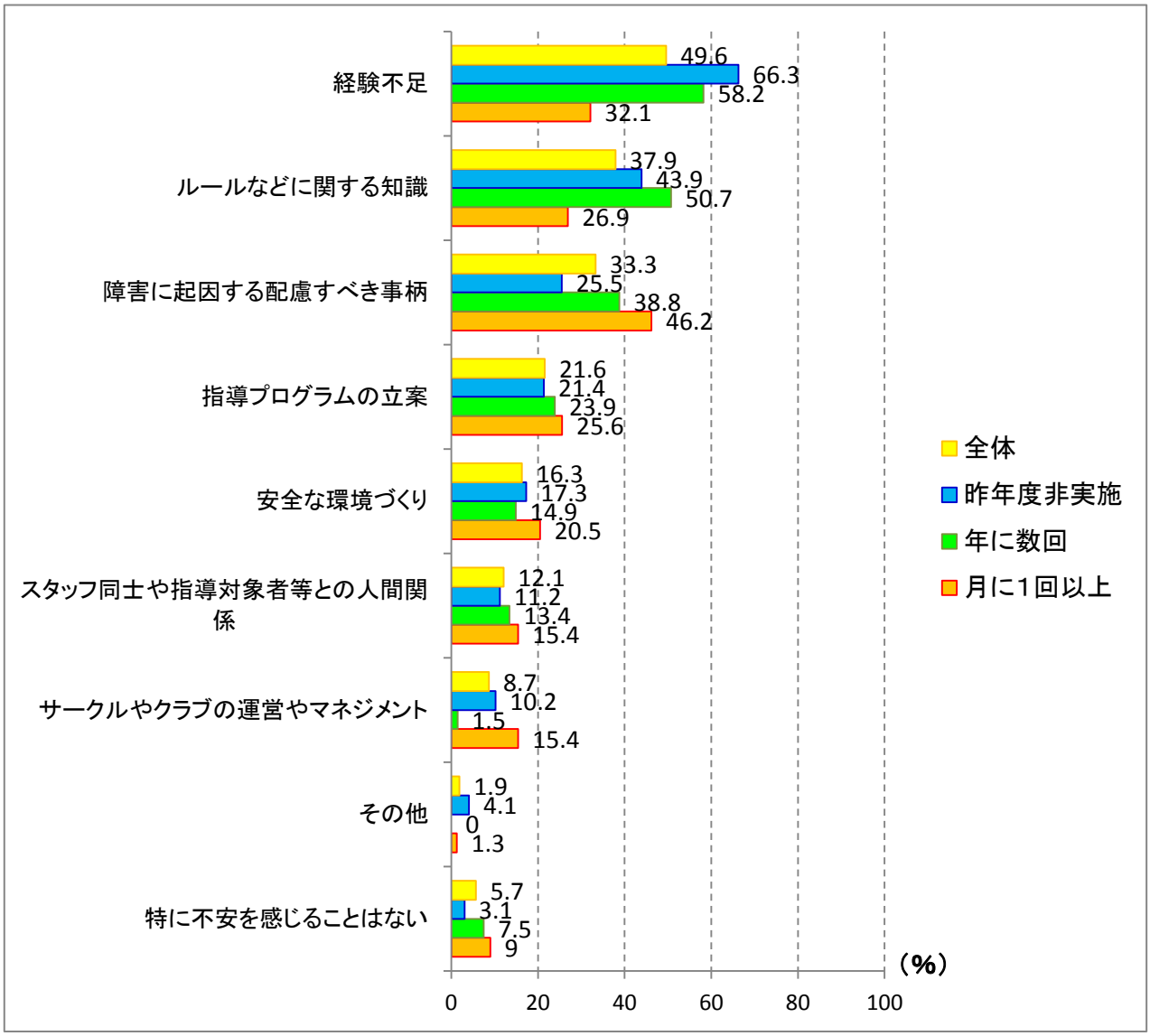

図 20　指導時の不安要素　(全体、活動頻度群別 複数回答)

(5) 活動に携わる際の問題点

「あなたが障がい者のスポーツ活動に携わる際の問題点は何ですか。」を尋ねたところ、「仕事や学業と重なることが多い」が 49.6%と最も多く、次いで「指導に不安がある」(30.1%)、「活動の場（機会）に関する情報が少ない」(22.8%)、「育児や介護など家庭の事情を優先せざるを得ない」(19.1%) などを問題点としていた（図 21)。

活動頻度を、「昨年度非実施」「年に数回」「月に 1 回以上」の 3 群に分けて活動の際の問題点を見たところ、「昨年度非実施」群では、「仕事や学業と重なることが多い」(48%) が最も多く、次いで「指導に不安がある」(33.7%)、「活動の場（機会）に関する情報が少ない」(22.4%)、「一緒に活動する仲間がいない」(22.4%)、「活動する場がない」(22.4%) を問題点としていた。「年に数回」群では、「仕事や学業と重なることが多い」(52.2%) が半数以上で、次いで「指導に不安がある」(34.3%)、「活動の場（機会）に関する情報が少ない」(29.9%)、「育児や介護など家庭の事情を優先せざるを得ない」(17.9%) を問題点と感じている。「月に 1 回以上」群では、「仕事や学業と重なることが多い」を挙げる者が 50%と最も多く、次いで「お金がかかる」(25.6%) を挙げている。特に「お金がかかる」は「月に 1 回以上」群では他の活動頻度群に比較して多かった。

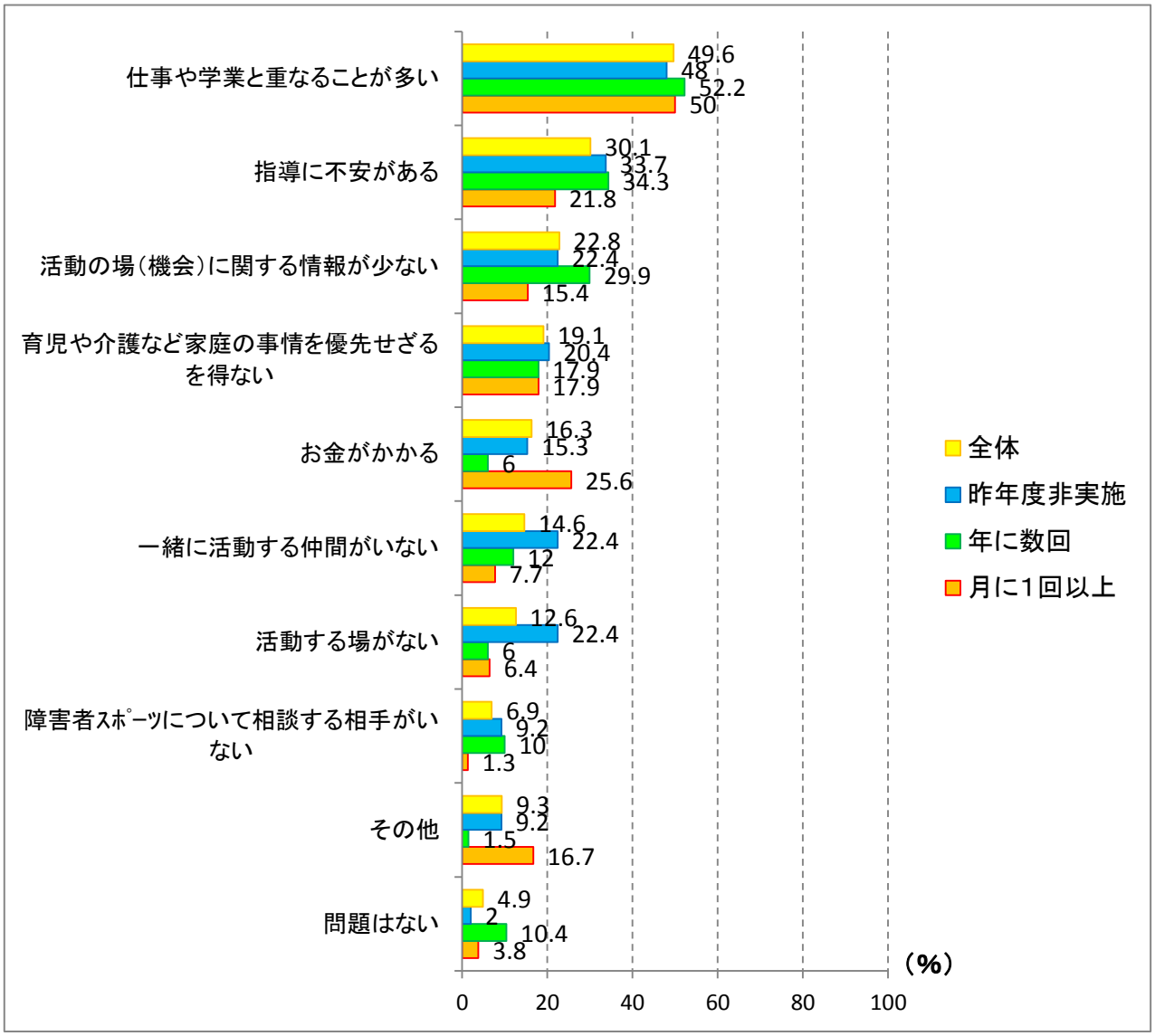

図 21　活動する際の問題点（全体、活動頻度群別 複数回答）

(6) 今後希望する研修内容

今後の研修会で受けたいと思う内容について尋ねたところ、「障がい者スポーツの指導方法（技術指導法)」が 58.9%と最も多く、次いで「ヒヤリ・ハットの事例と改善方法」(32.5%)、「障がい者のスポーツ指導の見学」(23.6%)、「安全な環境作り」(22.8%)、「障がい者スポーツの体験」(22.8%)、「大声を出す等問題行動への対処法」(18.7%) 等を挙げていた（図 22)。

資格種別に見ると、初級指導員、中級指導員は示された研修内容のほとんどに希望があった。上級指導員は、「障がい者のための競技規則」、「障がい区分について」等の競技スポーツに関する内容の希望が高かった。

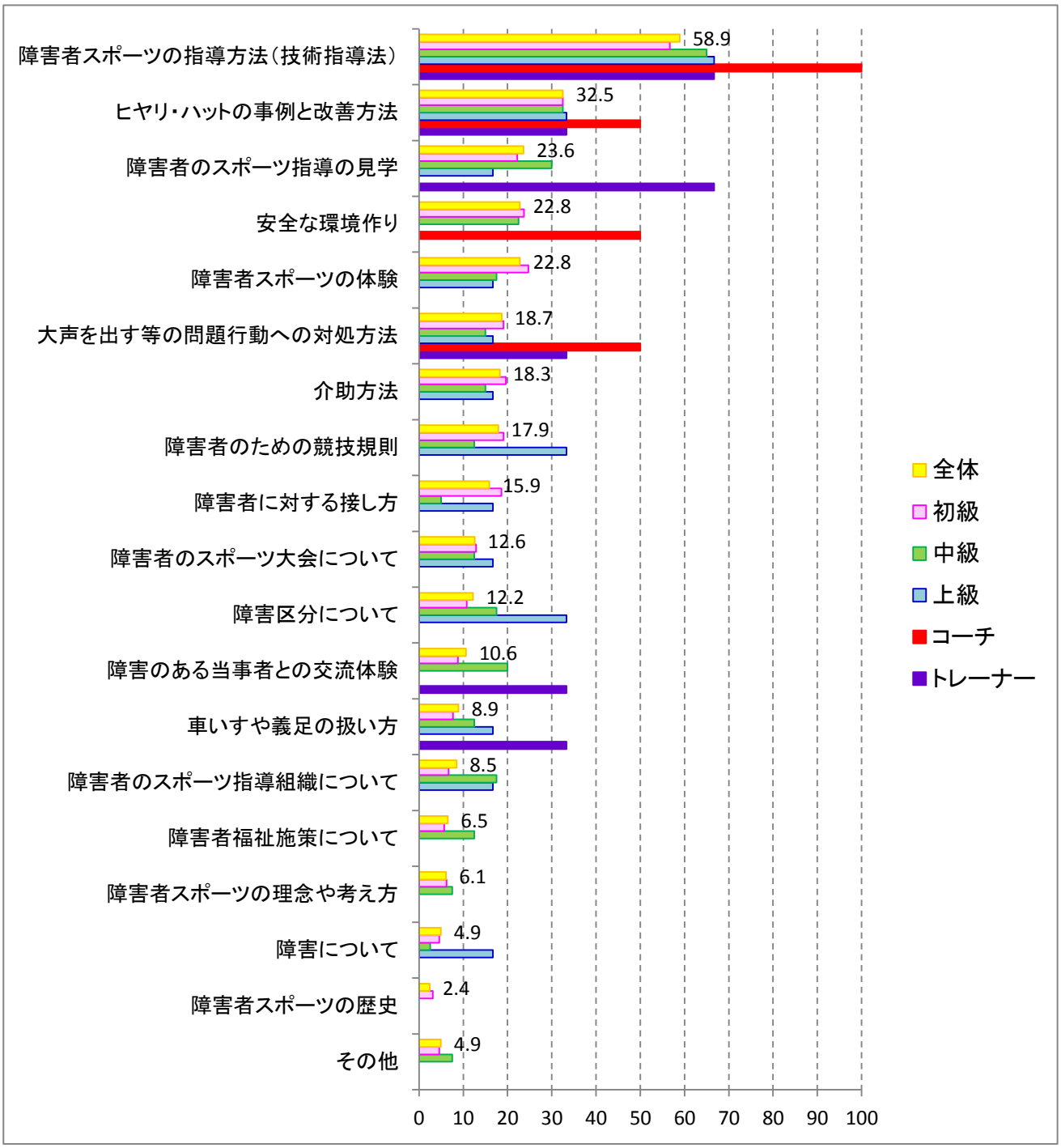

図 22　今後、研修会で受講したい内容　（全体、資格種別 複数回答）

(7) 今後の協力依頼への対応の可能性及び活動希望頻度

「今後、あなたの近くの障がい者施設や障がい者個人からスポーツや運動などにおける協力の依頼があれば、協力することは可能ですか。」と尋ねたところ、「可能である」と答えた者が 24.4%、「条件が合えば可能である」70.7%、「不可能である」は 4.1%であった（図 23）。

さらに、「可能である」と「条件が合えば可能である」と答えた指導員に、活動する際の条件としての活動希望頻度を尋ねたところ、「年数回」が 41.5%と最も多く、次いで「月 1 回程度」35.9%、「月 2～3 回程度」15.0%、「週 1 回程度」6.4%。「週 2～3 回」と回答した者は 0.9%であった（図 24）。

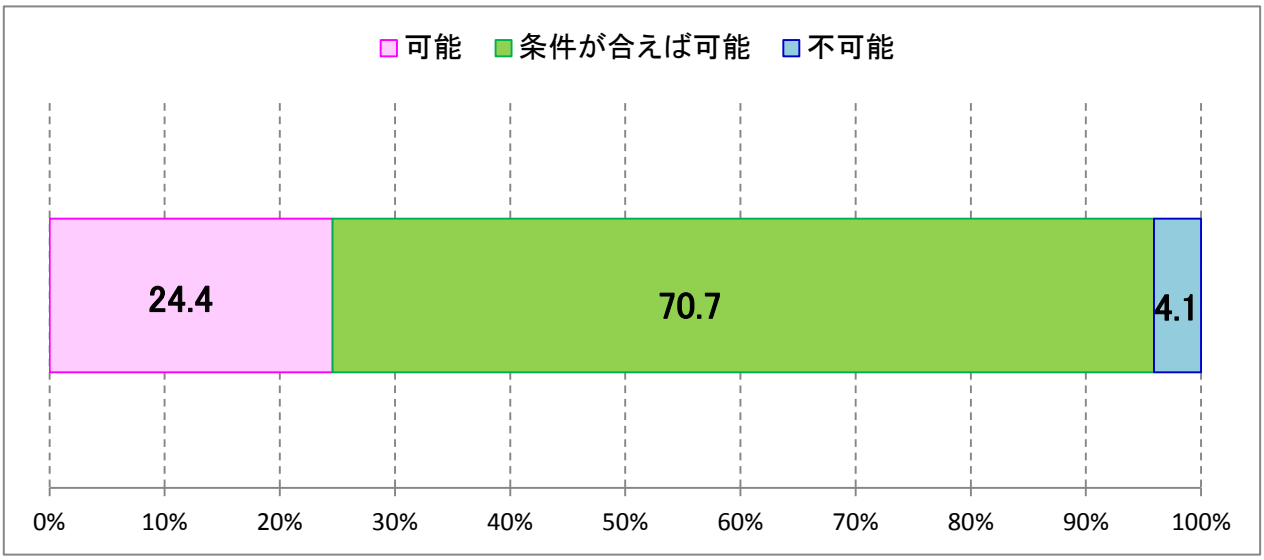

図 23　協力依頼への対応の可能性

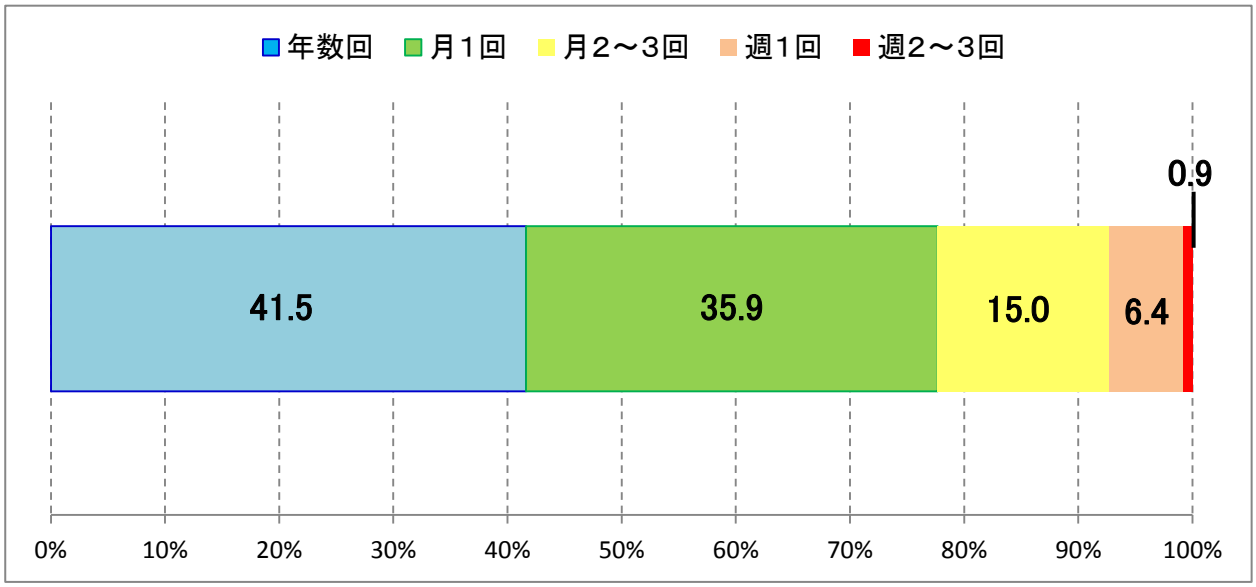

図 24　協力する際の活動希望頻度

３．全国調査との比較

文部科学省委託調査として、平成 25 年 3 月に笹川スポーツ財団が発刊した『健常者と障がい者のスポーツ・レクリエーション活動連携推進事業（地域における障がい者のスポーツ・レクリエーション活動に関する調査研究)』報告書の「(4) 障がい者スポーツ指導者に関する調査」（126 頁～164 頁）の内容を参考に今回の調査と比較考察を行った。

３．１ 日本障がい者スポーツ協会公認障がい者スポーツ指導者制度について

日本障がい者スポーツ協会（以下、日障協）は、1964 年のパラリンピック東京大会を契機に厚生省（現厚生労働省）の認可を受けて 1965 年に設立された。また、同年に開催された全国身体障害者スポーツ大会を契機に、厚生省が指導者講習会を日障協に委託し、1966 年から指導者養成が開始された。

現在、障がい者スポーツ指導者の資格には、障がい者スポーツ指導員（初級・中級・上級)、障がい者スポーツコーチ、障がい者スポーツ医、障がい者スポーツトレーナーの４つの資格がある。

茨城県は、平成 31 年 2 月 28 日現在で、上級指導員 10 人、中級指導員 69 人、初級指導員 476 人、スポーツコーチ 2 人、スポーツトレーナー7 人、スポーツ医 26 人が登録されている。茨城県の人口に対する障がい者スポーツ指導員数の割合（人口比）を見ると、0.02%であり、日本全体の人口に占める指導員数の割合の 0.017%と比較して多い結果となっている。

障がい者スポーツ指導員資格取得認定校は、大学、短期大学および専門課程を置く専修学校などにおいて、指定のカリキュラムを学校の授業で読み替えることにより、日本障がい者スポーツ協会公認の障がい者スポーツ指導員資格(初級及び中級障がい者スポーツ指導員)の取得を目指すことができる制度である。茨城県は、つくば国際大学、茨城県立医療大学、日本ウエルネススポーツ大学、流通経済大学、筑波技術大学、リリーこども＆スポーツ専門学校が初級障がい者スポーツ指導員資格を取得できる認定校となっている。

３．２ 全国調査の結果と茨城県の調査結果との共通点及び相違点について

全国調査と今回の茨城県における調査では、調査時期が異なっていること（全国調査：2012 年 11 月～2013 年 2 月、茨城県調査：2018 年 11 月～2018 年 12 月)、アンケート調査の回収率が異なっていること（全国調査の回収率：17.3%、茨城県調査の回収率：44.8%）などから、単純に比較検討することが必ずしも適切ではないという点を踏まえながら、両者の共通点及び相違点について考察する。

結論から述べると、両者には共通する結果が多く、相違点は少なかった。しかし、少ないながら見られた相違点には茨城県の障がい者スポーツの実状を反映していることが考えられる。また、今回の調査と共通する全国調査の結果は茨城県の課題でもあることが考えられる。そこで、今回の調査から見えてくる課題を考察し、今後の改善へ向けた提言に繋げていきたい。

回答した指導員の属性について、男女差はほとんどない。年代では、２０代と７０歳以上が少ないが他の年代はほぼ同じ割合であり、比較的バランスがとれていた。居住地については、県南に集中しており（79 人)、県西（40 人)、県北（34 人）は約半数、鹿行（16 人）は約５分の１の人数である。指導員の資格は約 80%が初級であり、中級以上の指導員の割合は全国調査と比較して少ない。全国調査では、年代が上がるに連れ、上位の資格保持者が増える傾向にあり、資格の取得経験年数についても、全国調査では、年代が上がるにつれて取得経過年数が増える傾向であったが茨城県の調査では必ずしもそうではなかった。逆に、60 代、70 代以上の人で、初級、2 年未満の方もいて、定年退職後に資格をとって活動を始めている層があることが示された。中級指導員では、取得経過年数が 2 年未満の人の割合が最も

多かったが、これは理学療法士の方で「茨城県理学療法士会主催の中級障がい者スポーツ指導員養成講習会」により、中級指導員資格を取得した方が比較的多かったことが影響していると考えられる。また、全国調査では、障がい者スポーツセンター職員が選択肢として含まれており、ここには常時、様々な障がい者スポーツを指導している中級以上の資格を有する指導員が多く存在しているが、茨城県には障がい者スポーツセンターが無いため、どうしても上位の資格を有する指導員数が少ないのは仕方がないかもしれない。

資格の取得目的及び資格取得の利点についての結果は、全国調査の結果とほぼ同様であった。

昨年度の活動頻度については、「まったくしなかった」人が約 4 割（39.8%）で、全国調査の 33.8%より多かった。20 代、30 代の若い世代に「まったくしなかった」人の割合が多いこと、60 代、70 代の高齢世代に「月に 1 回以上」の活動をしている人が多い点は全国調査と共通する特徴であったが、資格別でみると、全国調査に比べて中級指導員の「まったくしなかった」人の割合が多く、「月に 1 回以上」の活動をしている人の割合が少ないことが分かった。茨城県においては、中級指導員資格を有する若い世代の活用が鍵になることが示された。

主に活動している種目について調査したところ、今回の茨城県の調査からは特定の種目に偏りがあることがわかった。最も多かったのは「ボッチャ」で回答者の 4 分の 1 近く（24.4%）になり、次いで「卓球バレー」も同じく 4 分の 1 近く（23.2%）の方が活動していた。さらに両方の種目を実施している人は、39 名で 15.9%であった。また、陸上、水泳、レクスポーツ、フライングディスクも多かった。一方で車いすテニス、ブラインドサッカー、シッティングバレーなどのパラリンピック種目やボウリング、フットベースボールなどの全国障害者スポーツ大会の種目は 5 名以下と少なかった。主な活動種目については全国調査では調査項目に無いため比較することができないが、このような種目の偏りは茨城県特有の現象ではないかと思われる。また、活動する種目が無いと答えた人が 50 人（20.3%）もいたことは重要な課題だと考えられる。

障がい者スポーツ指導員としての主な活動場所については、全国調査の結果とほぼ同じ順番、割合であった。活動していないと答えた人の割合は 24.4%と全国調査よりも高かった。

障がい者スポーツ指導員としての活動の場での主な役割については、全国調査では「大会の審判、役員、補助員」が最も多かったのに比べ、今回の茨城県における調査では、「一緒に運動やプレーをする」が最多であった。この点については、障がい者スポーツ指導員が主に活動している種目として「ボッチャ」、「卓球バレー」、「レクスポーツ」、「フライングディスク」など、障がいのある人も無い人も共に楽しめるスポーツ種目が多く回答されていたことと関係していることが推察される。今回の調査で見られた、障がいのある人と一緒に運動やスポーツを楽しむという姿勢は、インクルーシブ・スポーツの実現に向かうための積極的な態度として評価できる。

現在の活動に対する満足度及び不安度について、全国調査に比べて全体的に満足度が低く、不安度が高い傾向にあった。(「満足している」: 全国 39.6%、茨城 22%　「不安はない」: 全国 34.9%、茨城 10%) また、全国調査では年代や資格のレベルが上がるにつれて満足度が上がり、不安度は下がる傾向にあったが、今回の茨城県の調査では、30 代、70 代で満足度が低かったり、30 代、40 代、中級指導員の不安度が高いという特徴があった。活動頻度との関連では、全国調査では活動頻度が上がるほど満足度が高くなり、不安度が減少する傾向があったが、今回の茨城県の調査では、月に 1 回、月に２～３回の頻度で活動している指導員さんより、週 1 回以上の頻度で活動している指導員さんの満足度が低く、月に 1 回程度活動している指導員さんの不安度が最も高い。指導時の不安要素の内容を見ると月 1 回以上活動している人は「障害に起因する配慮すべき事柄」を最も多く選択しており、活動頻度が多くなるほど、

障がいのある人の理解が深まり、それによってさらに障害に対する配慮についての疑問や不安が増してくることが推察される。「昨年度非実施」、「年に数回」など定期的な活動を行っていない指導員の場合は「経験不足」が不安要素として最も大きかった。

活動に携わる際の問題点については、全国調査の結果と同じ内容であった。注目したい点は、月に 1 回以上の定期的な活動をしている指導員の場合、「お金がかかる」ことを「仕事や学業と重なることが多い」の次に挙げており、定期的な活動をしていない指導員との違いが見られた。

今後希望する研修内容は、全国調査と比べて「障害者のスポーツ指導の見学」、「大声を出す等の問題行動への対処方法」、「障害者スポーツの体験」など上位に挙げられており、具体的な指導実践に関する内容のニーズが高いと思われる。また、「ヒヤリ・ハットの事例と改善方法」すなわちリスク・マネジメントに関する研修は、全国調査及び今回の茨城県の調査で希望が高く、実施しなければならない研修内容の一つと考えられる。

今後の協力依頼への対応の可能性及び活動希望頻度については、全国調査とほぼ同じ回答内容であった。「可能」、「条件が合えば可能」を合わせると 95.1%が協力できると回答している。活動頻度は「年数回」が最も多く、次いで「月 1 回」、「月 2～3 回」という割合も全国調査と同様であった。

３．３　今回の茨城県の調査のまとめと提言

今回茨城県の障がい者スポーツ指導者を実施した結果、以下のようなことが示された。

① 茨城県の障がい者スポーツ指導員は福祉、教育、医療関係者以外にそれ以外の職業の方や無職の方も多い。各年代にわたって指導員がいること、高齢になってから指導員資格を取得される人もいるなど、多様な構成となっている。県内の地域における人数の差があった。但し、上位の資格を目指す人を増やすことや、活動できる場を増やすことが必要である。

② 登録された障がい者スポーツ指導員 549 人のうち、回答していただけた 246 名の中では、6 割が活動をしており、定期的な活動をしている人は 3 割程度であった。50 代以上の指導員が定期的な活動において積極的に参加しているようであった。今後は若い世代の指導員が活動できるような機会の提供が必要になる。

③ 活動している種目には茨城県ならではの特色が見られた。例えば、「ボッチャ」「卓球バレー」「フライングディスク」のような、障がいの有無に関わらず共に楽しめる種目が多く行われる傾向にあった。このような面は今後インクルーシブ・スポーツにつながる可能性があり、推奨していくべきであるが、同時に活動している指導員が少ないスポーツの普及も行っていく必要がある。

④ 比較的、満足度が低く、不安度が高いという傾向が見られた。不安の要素を取り除けるような障がい者スポーツ体験や研修を計画的に行う必要性があると思われた。研修内容として、具体的な障がい者スポーツの指導に結びつくような実践的な内容やリスク・マネジメントに関する内容が必要である。特に不安度が比較的高い 20 代、30 代の人、中級指導員に向けた研修を行う必要がある。

⑤ 協力依頼に対しては肯定的な意見が多かったが、仕事や学業と重なる場合の対応方法や、お金がかかることに対する対応について工夫していく必要がある。

【参考文献】

・ 笹川スポーツ財団（2013）(4) 障害者スポーツ指導者に関する調査『健常者と障害者のスポーツ・レクリエーション活動連携推進事業（地域における障害者のスポーツ・レクリエーション活動に関する調査研究）報告書』, pp126～164

資料

茨城県の障がい者スポーツ指導者に関する調査

本調査は、茨城県における障がい者スポーツの普及と振興を目的として、茨城県が寄附講座として筑波大学に設けたアダプテッド体育・スポーツ講座の担当者が実施します。調査の目的は、茨城県における障がい者スポーツ指導者に関する現状及び課題等を把握することによって、地域で健常者と障がい者が共にスポーツ・レクリエーション活動を楽しむための方策に資するデータの把握及び分析を行うことです。調査結果は、茨城県の障がい者スポーツ活動の充実、発展のための基盤資料として活用されます。さらに 2019 年に茨城県で実施されます全国障害者スポーツ大会「いきいき茨城ゆめ大会 2019」のスムースな運営に貢献することも視野に入れています。また、回答は統計的に処理され、回答者の個人情報等が公表されることは一切ありません。ご多忙のところ、誠に恐れ入りますが、調査の趣旨をご理解のうえ、ご協力くださいますようにお願い申し上げます。締め切り 2018 年 12 月 7 日（金）

１．回答者の属性について伺います。当てはまる所に○をおつけください。

① 男女　（　）女　（　）男

② 年齢　（　）10 代　（　）20 代　（　）30 代　（　）40 代　（　）50 代　（　）60 代　（　）70 以上

③ 現在の資格　（　）初級　（　）中級　（　）上級　（　）障がい者スポーツコーチ　（　）障がい者スポーツ医　（　）障がい者スポーツトレーナー

④ 職業　（　）無職　（　）福祉関係の施設・機関等のスタッフ　（　）医療関係のスタッフ　（　）教育関係の施設・機関等のスタッフ　（　）スポーツ関係の施設・機関等のスタッフ　（　）これらに含まれない職業

⑤ 居住地域　（　）県北　（　）県央　（　）鹿行　（　）県西　（　）県南

２．資格取得時の受講講習を伺います。当てはまる所に○をおつけください。

（　）日本障がい者スポーツ協会主催の講習会　（　）茨城県の講習会

（　）認定校で取得　（　）日本体育協会スポーツ指導者対象の講習

（　）日本理学療法士協会主催の中級スポーツ指導員養成講習会　（　）市町村の講習

（　）その他（　　）

３．資格の取得経過年数を伺います。当てはまる所に○をおつけください。

（　）10 年以上　（　）5 年以上～10 年未満　（　）2 年以上～5 年未満

（　）2 年未満

４．資格を取得された目的を伺います。当てはまる所に○をおつけください。（複数回答）

（　）障がい者の競技スポーツに関心があった　（　）職務上必要となった

（　）障がい者スポーツに関する知識や技能を高めたかった

（　）障がい者の日常的なスポーツに関心があった　（　）障がい者福祉に関心があった

（　）ボランティア等で社会貢献をしたかった　（　）就職時に有利だと考えた

（　）仕事の内容から取得するのが良いと考えた　（　）友人や知り合いに勧められた

（　）障がい者スポーツ指導員として社会的な信頼を得たかった

（　）資格が必要な大会へも参加するため　（　）関連団体に勧められた　（　）なんとなく

５．あなたが障がい者スポーツ指導員資格を取得して良かったことは何ですか。当てはまる所に○をおつけください。（複数回答）

（　　）様々な人との出会いが増えた　　（　　）障がい者の笑顔がたくさん見られた
（　　）障がい者スポーツ指導に関わる情報が得やすくなった
（　　）取得前よりも障がい者スポーツに関わる回数が増えた
（　　）ボランティア等で社会貢献ができた
（　　）障がい者の様々な面での成長に接することができた
（　　）取得前よりも障がい者への適切なスポーツ指導ができるようになった
（　　）仕事上で役に立った　（　　）指導者としての自信と責任感が高まった
（　　）指導者としての社会的地位が向上した（無資格者との差別化）
（　　）就職等で有利であった　（　　）特になかった

６．指導員としての活動の状況について伺います。当てはまる所に○をおつけください

(1) 昨年度、障がい者スポーツ指導員としてどの程度活動しましたか。

（　　）全くしなかった　（　　）1 年に数回　（　　）月に 1 回程度　（　　）月に 2～3 回程度
（　　）週に 1 回程度　（　　）週に 2～3 回程度　（　　）ほぼ毎日

(2) 主なスポーツ種目は何ですか。（複数回答）

（　　）水泳　（　　）陸上競技　（　　）バスケットボール　（　　）車いすバスケットボール
（　　）バレーボール　（　　）シッティングバレーボール　（　　）フロアバレーボール
（　　）卓球バレーボール　（　　）ふうせんバレーボール　（　　）バドミントン
（　　）卓球　（　　）サウンドテーブルテニス　（　　）テニス　（　　）車いすテニス
（　　）サッカー　（　　）ブラインドサッカー　（　　）ハンドサッカー
（　　）アンプティサッカー　（　　）電動車いすサッカー　（　　）野球・ソフトボール
（　　）フット（キック）ベースボール　（　　）グランドソフトボール　（　　）ボッチャ
（　　）フライングディスク　（　　）スポーツチャンバラ　（　　）柔道　（　　）ボウリング
（　　）マラソン　（　　）車いすハンドボール　（　　）車いすラグビー　（　　）ダンス
（　　）車いすダンススポーツ　（　　）ハンドアーチェリー　（　　）自転車
（　　）レクリエーションスポーツ　（　　）スポーツウェルネス吹矢
（　　）その他（　　）

(3) 指導員としての主な活動場所をお伺いします。（複数回答）

（　　）大会等のイベント　（　　）各種競技団体・障がい者スポーツ関連団体等
（　　）地域のクラブやサークル　（　　）職場
（　　）福祉・医療・教育等の施設・機関（職場除く）　（　　）障がい者との個人的な付き合い
（　　）活動していない　（　　）その他（　　）

(4) 活動場所での主な役割についてお伺いします。（複数回答）

（　　）大会の審判、役員、補助員　（　　）運動やスポーツ教室での指導の補助
（　　）一緒に運動やプレーをする（　　）運動やスポーツ教室での主たる指導者
（　　）各種競技・障がい者ｽﾎﾟｰﾂ関連団体等の運営スタッフ　（　　）選手や参加者の付き添い等
（　　）活動をしていない　（　　）その他（　　）

７．　指導員としての活動の評価及び問題点についてお伺いします。

(1) 活動状況に対する満足度はいかがですか。

（　　）満足　　（　　）どちらともいえない　　（　　）不満足

(2) 指導時の不安度はありますか。

（　　）不安はない　　（　　）どちらともいえない　　（　　）不安がある

(3)指導時の不安要素はなんですか。(複数回答)

（　　）障がいに起因する配慮すべき事柄　（　　）経験不足　（　　）ルールなどに関する知識

（　　）指導プログラムの立案（指導の内容や方法を決める）　（　　）安全な環境づくり

（　　）スタッフ同士や指導対象者等との人間関係　（　　）サークルやクラブの運営やマネジメント

（　　）特に不安を感じることはない　（　　）その他（　　）

(4) 活動に携わる際の問題点は何ですか。(複数回答)

（　　）仕事や学業と重なることが多い　（　　）指導に不安がある

（　　）活動の場（機会）に関する情報が少ない　（　　）一緒に活動する仲間がいない

（　　）育児や介護など家庭の事情を優先せざるを得ない　（　　）お金がかかる

（　　）活動する場がない　（　　）障がい者スポーツについて相談する相手がいない

（　　）問題はない　（　　）その他（　　）

(5)今後希望する研修内容を教えてください。(複数回答)

（　　）障がい者スポーツの指導方法（技術指導法）　（　　）介助方法　（　　）安全な環境作り

（　　）緊急時の対処方法、ヒヤリ・ハットの事例と改善方法　（　　）障がい者スポーツの体験

（　　）障がい者に対する接し方　（　　）障がい者のための競技規則　（　　）障がいについて

（　　）大声を出す等の問題行動への対処方法　（　　）障がい区分について

（　　）障がい者のスポーツ指導の見学　（　　）車いすや義足の扱い方

（　　）障がい者のスポーツ大会について　（　　）障がい者スポーツの理念や考え方

（　　）障がい者福祉施策について　（　　）障がいのある当事者との交流体験

（　　）障がい者のスポーツ指導組織について　（　　）障がい者スポーツの歴史

（　　）その他（　　）

(7)今後、あなたの近くの障がい者施設や障がい者個人からスポーツや運動などにおける協力の依頼があれば、協力することは可能ですか。

（　　）可能である　　（　　）条件が合えば可能である　　（　　）不可能である

(8)「可能である」「条件が合えば可能である」とお答えになった方にお伺いします。活動する際の条件として希望される活動の頻度はどれくらいですか。

（　　）年数回　（　　）月１回程度　（　　）月２～３回程度　（　　）週１回程度

（　　）週２～３回程度　（　　）ほぼ毎日

アンケートは以上です。ご協力ありがとうございました。